

## 第 35 回日本比較文化学会全国大会

日時：2013 年 6 月 8 日（土）

会場：同志社大学今出川キャンパス良心館

(<http://www.doshisha.ac.jp/information/campus/access/imadegawa.html>)

9:00 受付開始（良心館 3 階）

9:30～11:30 シンポジウム

11:30～12:45 昼食時間（当日は、学内の食堂をお使いいただけます。）

12:45～14:15 研究発表

14:15～14:30 休憩時間

14:30～16:00 研究発表

16:00～16:15 休憩時間

16:15～16:30 総会

16:30～17:30 講演

17:45～19:45 懇親会（「アマーク・ド・パラディ」寒梅館：同志社大学キャンパス内）

(<http://www.hamac-de-paradis-kanbaikan.jp/>)

懇親会にご出席の会員は、6 月 3 日（月）までに会費の振り込みをお願いいたします。

会費： 一般 5,000 円、学生・大学院生 4,000 円

振り込み先： 南都銀行 平城支店 普通口座 0 3 7 6 4 2 3

日本比較文化学会関西支部 代表山内信幸（やまうちのぶゆき）

すべての教室においてパワーポイントが使用できます。パソコンは念のためご自身のものをご持参くださり、発表前の休憩時間に設定をお願いいたします。さらに接続トラブルに備えてパワーポイントのファイルを USB メモリに入れてご持参いただくと安心です。Mac を使用される場合は接続用アダプターを各自でご用意ください。また、レジュメが使われる場合は、研究発表の場合 25 部ご自身でご用意ください。

## 【シンポジウム】

9:30～11:30 良心館3階 RY304教室

テーマ：「比較文化学」はどのように教えられているか？—現状と展望—

司会：山内信幸（同志社大学教授/日本比較文化学会会長）

1. 川口雅也（浜松学院大学准教授/日本比較文化学会中部支部）  
「比較の出発点」
2. 山崎祐一（長崎県立大学教授/日本比較文化学会九州支部）  
「異文化間コミュニケーション能力の基礎を培う英語教育の実践  
～比較文化を通して言語や文化を正しく深く理解する～」
3. 佐藤知条（湘北短期大学講師/日本比較文化学会関東支部）  
「比較文化学の近接領域からの問い—教育学を例として—」
4. 金英順（韓国・建陽大学校教授/韓国日本文化学会常任理事）  
「韓国大学における「日本」関連教育の方向性」
5. 落合由治（台湾・淡江大学教授/台湾日本語文学会理事）  
「台湾の日本語教育における日本事情、日本文化関係授業の現状と展望」

## 【研究発表】

### 第1室（良心館4階 RY403 教室）

〈前半〉 12:45～14:15

司会：堀口誠信（徳島文理大学教授）

1. 朱文菲（同志社大学大学院博士前期課程）

「文体のバリエーションと生じる印象の違いについて—日中韓の比較から—」

2. 林青樺（台湾・淡江大学助理教授/台湾日本語文学会理事）

「実現系の可能表現の意味について—否定形を中心に—」

3. 藤枝善之（京都外国語大学・短期大学教授）

『『シェーン』で学ぶアメリカ文化』

〈後半〉 14:30～16:00

司会：八尋春海（西南女学院大学教授）

4. 堀口誠信（徳島文理大学短期大学部教授）

「新入生英語診断テストの結果比較：文法項目とモチベーションに注目して」

5. 江秀姿（台湾・銘伝大学助理教授）

梁蔚然（台湾・銘伝大学大学院修士課程）

「台湾で市販されているオノマトペ教材の分析」

### 第2室（良心館4階 RY404 教室）

〈前半〉 12:45～14:15

司会：野口周一（湘北短期大学教授）

1. 白川俊介（日本学術振興会特別研究員 PD）

「儒教の文化的伝統から見た西洋現代リベラリズムの批判的検討—倫理の「グローバル化」に抗じて—」

2. 藤原まみ（九州栄養福祉大学講師）  
「ラフカディオ・ハーンにおける身体と文字」

3. 藤田昌志（三重大学准教授）  
「吉野作造の日本論・中国論」

〈後半〉 14:30～16:00

司会：石崎一樹（奈良大学准教授）

4. 倉橋愛（大阪大学大学院博士後期課程）  
「フォート・ウイリアムカレッジにおける教育活動についての文献学的考察」

5. 塚本美穂（京都外国語大学大学院後期課程）  
「米国におけるキンセアニューラの浸透—メキシコ文化の混淆性」

6. 長谷川詩織（愛知教育大学教育創造開発機構研究員）  
「飲酒のアポリアからの脱却—禁酒運動と映画の近代化—」

### **第3室（良心館4階 RY405 教室）**

〈前半〉 12:45～14:15

司会：長谷部陽一郎（同志社大学准教授）

1. 浦千里（関西大学大学院後期博士課程）  
「ハムレットが語るエリザベス朝演劇の変化」

2. 水町いおり（名古屋市立大学大学院博士後期課程）  
「『ボヴァリー夫人』におけるジェンダー構造の考察—エンマの「男性化」、シャルルの「女性化」に焦点をあてて—」

3. 伊藤佳世子（京都大学非常勤講師）  
「Eugene O'Neill の舞台における苦悩と悲哀の表出手法—*The Sniper* と *Shell Shock* を中心に—」

〈後半〉 14:30～16:00

司会：安藤雅之（常葉大学大学院教授）

4. 高橋貴之（公務員試験協会講師）

「ノア・ウェブスターのリベラル・エデュケーション論：若者論・女性論の一側面」

5. 澤智恵（早稲田大学非常勤講師）

「ジョーゼフ・キャンベルと東洋神話」

6. 佐藤静（宮城教育大学教授）

「心の支援の構造に関する考察(7)―心の支援の基盤レベルと対応レベルの関係性をめぐって―」

#### **第4室（良心館4階 RY406 教室）**

〈前半〉 12:45～14:15

司会：金志佳代子（兵庫県立大学准教授）

1. 横地徳広（弘前大学専任講師）

「九鬼周造と、2人の父―彼らは〈いき〉な男だったのか？―」

2. 武富利亜（九州大学大学院博士後期課程）

「カズオ・イシグロの *The Unconsoled* における父親―父子関係と祖父孫関係を比較して―」

3. 黄如萍（台湾・国立高雄餐旅大學助理教授/台湾日本語文学会事務局長）

「坂口安吾「犯人」試論」

〈後半〉 14:30～16:00

司会：近藤俊明（東京未来大学教授）

4. 崔秀蓮（九州大学大学院博士課程）

「パンソリの語りにみる「悲壮」と「滑稽」の共存についての一考察」

5. 利根川由奈（京都大学大学院博士後期課程/日本学術振興会特別研究員）

「マルセル・ブローターズの作品が提示するカテゴリーの境界―人間・美術・文化の観点から―」

6. 川越ゆり（東北文教大学短期大学部准教授）

「*The Moorchild* : 現代アメリカファンタジーにおける伝承的モチーフ」

**第5室（良心館4階 RY407 教室）**

〈前半〉 12:45～14:15

司会：佐藤和博（弘前学院大学教授）

1. 山内由賀（京都大学大学院博士後期課程）  
「フランス第二帝政期における宗教と女子教育」
2. 西美都子（摂南大学非常勤講師）  
「Wilde の反復表現に関する一考察—“The Nightingale and the Rose” について—」
3. 中村友紀（関東学院大学准教授）  
「『白い悪魔』の disorder 表象とカタルシス：復讐劇によるパブリック圏生成の条件」

〈後半〉 14:30～16:00

司会：梶原雄（同志社大学嘱託講師）

4. 中村茂徳（西南女学院大学非常勤講師）  
「ハードウィック・D. ローンズリィ牧師に関する一考察—ケジック工芸学校について—」
5. 山内啓子（神戸松蔭女子学院大学准教授）  
「「菓子」をめぐる日英対応表現比較」
6. 山崎祐一（長崎県立大学教授）  
「自文化発信のための国際交流と海外サービスラーニング～グローバル人材の育成を目指した外国語教育の実践～」

**第6室（良心館4階 RY408 教室）**

〈前半〉 12:45～14:15

司会：奥村訓代（高知大学教授）

1. ティウク・イヒティアリ（京都大学大学院博士後期課程）  
「日本語の「XはYがZ」構文とインドネシア語との対応関係について」

2. 岡良和（人間環境大学教授）

「英語句動詞 take in の比喩表現としての意味」

3. 江雯薰（台湾・淡江大学准教授）

「頻度副詞に関する一考察—程度副詞との関連をめぐって—」

〈後半〉 14:30～16:00

司会：高橋栄作（高崎経済大学准教授）

4. 王天保（台湾首府大学非常勤アシスタント教授）

「複文の推論関係について—接続助詞「けれども」と「のに」の比較を通して—」

5. 森永弘司（同志社大学嘱託講師）

北島美咲（同志社女子大学嘱託講師）

「2つの映画を使用したプレゼンテーション能力および英語力伸長の試み」

6. 奥村訓代（高知大学教授）

「防災弱者である外国人のための異文化と知識の共有に関する研究」

#### **第7室（良心館4階 RY409 教室）**

〈前半〉 12:45～14:15

司会：鈴木宣行（創価大学教授）

1. 奥山裕介（大阪大学大学院博士後期課程/日本学術振興会特別研究員）

「内なる「異境」の発見—19世紀デンマーク文学・芸術におけるユラン半島ヒース文化の美的表象」

2. 関口英里（同志社女子大学准教授）

「現代消費社会における伝統文化の新たな発展—婚礼イベント企画開発プロジェクトを通して—」

3. 小笠原真司（長崎大学教授）

「長崎海軍伝習所が日本の近代化に果たした役割」

〈後半〉 14:30～16:00

司会：山下明昭（香川大学教授）

4. 鄒賢（同志社大学大学院博士前期課程修了）

「日中対照研究に基づく感情表現の人称制限と表現形式について」

5. 林裕二（西南女学院大学教授）

「川端康成の「雪国」と Seidensticker 英訳の比較—呼称について—」

6. 曾秋桂（台湾・淡江大学教授/台湾日本語文学会理事長）

「3・11 原発文学作品を教材とした授業試論—台湾の大学4年生が見た異文化の観点—」

## 【総会】

時間：16:15～16:30

会場：良心館3階 RY304 教室

## 【講演】

時間：16:30～17:30

会場：良心館3階 RY304 教室

講師： 狩野博幸先生（同志社大学文化情報学部教授）

タイトル： 学際的研究の真の精華—伊藤若冲と経済学—

狩野博幸先生プロフィール：日本近世美術史専攻。京都国立博物館・京都文化資料センター長時代、スター・ウォーズ展、伊藤若冲展などを企画し、注目を集める。主な著書に『曾我蕭白』（至文堂）、『目をみはる伊藤若冲の「動植綵絵」』（小学館）、『伊藤若冲大全』（小学館）など。



「比較文化学」はどのように教えられているか？—現状と展望—の司会にあたって

山内信幸（同志社大学教授/日本比較文化学会会長）

今年度のシンポジウムのテーマは、「比較文化学」はどのように教えられているか？—現状と展望—で、比較文化学科・学部を持ついくつかの大学の事例、また、大学で教えられている「比較文化」関係のクラスの紹介などを通して、私たちの学会として比較文化学の構築に向けて学ぶところはなにかを探ることを企図しています。

『比較文化研究』No. 91 に寄せた拙稿「日本の比較文化学の新たな展開に向けて—日本比較文化学会の貢献—」では、学会の発展史をシンポジウムのテーマ変遷からおおざっぱにまとめ、まず、第1期を第1回全国大会（1979年）～第17回全国大会（1995年）まで、ある一定の期間を費やして、「比較文化論」が扱うべき各論を定位させつつ、考究を深め、「異文化」にその関心が向けられていた時期と位置づけました。第2期をそのあとの第24回全国大会（2004年）までとし、「比較文化論」という限られた研究領域から、よりマクロな枠組みの中で、とりわけ、「国際化」という視点の中での研究を目指すべく、「比較文化論」から「比較文化学」への脱皮を図る時期といたしました。さらに、第25回全国大会（2005年）以降は、第3期として、「比較文化学」の内実化の充実にその関心が移り、また、文化の差異を「異文化」として「気づき、際立たせる」のではなく、「多文化」として「受け入れ、認める」ことを是とする段階に入ったと指摘いたしました。

このような学問的文脈の中で、成熟期を迎えたともいえる「比較文化学」が、さらなる拡充・発展を目指すためには、後継の若手研究者の育成を目指した裾野の拡充は急務の課題です。最近では、比較文化学を主たるフィールドとして活躍する研究者も増え、本学会の存在意義については、韓国日本文化学会や台湾日本語文学会との学術交流の実現にも表れているように、その国際的な進展がますます期待される学問領域と見なされるようになってきました。日本比較文化学会ならびに比較文化学が、これからの時代を見据えた活力のある、そして豊かな将来性をもつ学会ならび研究領域として、自立的な発展を遂げるためにも、今般のシンポジウムが有意義なものとなることを願っています。

## 1. 比較の出発点

川口雅也（浜松学院大学准教授/日本比較文化学会中部支部）

### 1) 授業における比較の導入の実例

#### ① 「主題演習」において：

『英語＝国際語』なのか？』という主題で、米国の先住民族に対するヨーロッパ系移民の同化政策を扱い、英語という一言語が、米国で広く使われるようになっていった歴史的背景を学んだ。

学生にとって、より身近なものと実感しつつ学べるように、日本においても、日本民族により、アイヌ民族、沖縄民族に対して同様の同化政策がなされたことと、比較しつつ学習を進めた。

#### ② 「比較文化論」において：

米国のテレビ・ドラマの中で、日本、あるいは日本との関わりが、どのように描かれているかを鑑賞し、学生たちの印象を出発点に、考察を進めた。東北の震災、広島・長崎への原爆投下を扱ったドラマを題材に用いるとともに、震災時に米国の友人たちから受け取ったメール、さらには、原爆投下を扱ったドラマに主演した俳優からのメール等も考察を深めるために使用した（*Touch, Star Trek*）。

また、米国は自国で起きた同時多発テロに対してどのように反応したのか、日本の自国での震災への反応との比較を交えて考察した（*CSI: New York, America: Tribute to Heroes*）。

### 2) 文化比較の在り方についての提案

#### ① 比較をすることの意義：

同じ人間であるのに、属する文化によって、様々な視点・言動に違いが生じるのは何故なのか、というところから文化比較は始まったのではないか。それゆえ、比較対象において表層化している違いを認識するだけではなく、そうした違いはそれぞれの文化的状況、価値観に適応する形で生じているという認識に基づいて、深層にある人間の普遍的性質を知ろうとすることに、比較文化の意義があるのではないか（埴原和郎「人種の差とは何か」）。

#### ② 広い視野で、比較対象・媒体を選ぶべきではないか：

支配民族の文化を比較するだけでなく、先住民族の文化を比較するということも、もっと為されても良いのではないか。

また、テレビ・ドラマというのは、学生たちにとって、小説よりも身近な存在であり、それを題材とする文化比較も、より身近な学習となりうる。虚構でしか語れない真実があることは周知のことであろうが、テレビ・ドラマの文学性が認識されているかといえば疑問が残る。文学としてのテレビ・ドラマの文化比較への活用を提案する。

## 2. 異文化間コミュニケーション能力の基礎を培う英語教育の実践

### ～比較文化を通して言語や文化を正しく深く理解する～

山崎祐一（長崎県立大学/日本比較文化学会九州支部）

2011年4月より、日本の公立小学校において「外国語活動」という名称で、事実上の英語教育が始まった。これは、わが国が外国語教育の低年齢化を図ることにより、異文化に属する人たちとのコミュニケーション能力の育成、国際交流に対する積極的態度、及び異文化に対する偏見の排除や異文化を容認していく姿勢の重要性を訴え始めたということでもあり、その達成に対する模索の一端と言える。

長崎県佐世保市は米海軍基地と共存を図り、アメリカ文化が混在するという特色を持っており、日米双方の児童たちが外国語活動を通して両文化を客観的に比較、理解することで、異文化間コミュニケーション能力の獲得に努力している。佐世保市にはアメリカンスクール3校が存在し、約800人のアメリカ国籍の子どもたちが日本語及び日本文化を学んでいる。初等部では、中・高等部における日本語教育の準備段階として「Host Nation」という科目を必修で設け、日本文化教育が行われている。外国語教育導入以前に比較文化や異文化理解教育を取り入れることにより、学習者の考え方が柔軟な幼少期のうちに、学習者に異質なものを容認する態度を育成する意図がある。このような環境の中、佐世保市内の公立小学校数校がアメリカンスクールと継続的に連携することにより、「英会話ありき」の授業ではない、異文化理解を重視した外国語活動を展開している。子どもたちは、教室での取組内容を基盤に、実際に異文化のフィールドに出向き異文化体験をし、また、英語を使って自文化を自ら発信する。その体験を通して得られた知見を、外国語活動の授業にフィードバックし、異文化間コミュニケーション能力の素地を培うことに役立てようとしている。

異文化理解を視野に入れた外国語教育は、アメリカにおいてもすでに議論され実施されている。アメリカにおける外国語教育基準には、その中に culture（文化）という言葉が繰り返し使われている（ACTFL 1996）。高校における AP 教育（Advanced Placement）に至っては、正式科目名が Japanese Language and Culture（日本語と日本文化）となっている。つまり、言葉と文化は不可分であるという考え方である。小学校段階ではどうかというと、外国語の科目ではなく、異文化理解中心の授業が展開されている。日本の小学校では、最初から英語が好きな子どももいるだろうが、英語が嫌いな子ども、英語に興味がない子ども、英語から一歩引いている子どもにどう教え、どう対応し、モチベーションを高めていくかが問題である。小学校の段階で、もうすでに英語の苦手意識や英語嫌いを作り出しているのもまた事実である。もっと子どもたちが言葉の背後にある文化に気づくことで言葉の学習に興味を持ち、中学校での英語学習に繋がる準備をしなければならない。

外国語活動の目的が、異文化の人とのコミュニケーション能力を高めること、あるいは異文化の人の思考方法や行動様式を知り、ひいてはそれを「国際理解」、「国際平和」に繋いでいくことであるのならば、コミュニケーションの言語的要素のみならず社会文化的要素にも目を向ける必要がある。そして、それが真の地球規模のコミュニケーション能力に結びついていくのではない。「国際理解」と言えば聞こえがよい。しかし、問題なのは英語教育で国際理解教育を装う行為になってはいないかということである。「コミュニケーションなのだから、言葉だけを教育すればよい」という意見もあるが、日本人英語学習者にとって英語を使ったコミュニケーションとは、異文化の人とやり取りをする、まさに異文化間コミュニケーションであろう。学習者が円滑な異文化間コミュニケーションを実現できるようにするには、異文化を理解するとともに自文化についても臆することなく発信ができ、異文化圏の人々と適切に、かつ効果的に相互作用をし、目的を達成できる能力を育成することが必要なのではないだろうか。

### 3. 比較文化学の近接領域からの問い—教育学を例として—

佐藤知条（湘北短期大学講師/日本比較文化学会関東支部）

これまで日本比較文化学会において、「比較文化」領域の主たる研究領域として取り扱われてきたのは、言語、文学、地域理解（文化人類学的アプローチを含む）、思想、芸術（メディア、コミュニケーションを含む）などである（『比較文化研究』掲載論文参照）。

また研究の方法論としての「比較」においては、日本的なものと、そこに包摂されないものという軸が設定されることもしばしばで、この傾向は比較文化学部／学科を設置している大学においても同様といえる。

本発表では、これらの比較文化論（学）に近接した学問（文化）領域における「比較」のあり方に触れながら、比較文化学の構築に向けて議論する題材を提供したい。具体的には、以下の3つの話題を提案したい。

1. 教育（学）の領域における「比較」の例
2. 学際・越境・比較...「比較」する対象をめぐる問い：学習者（研究者）が、自ら所属する集団の文化や領域を越境する行為は「比較」たりうるのか。
3. 比較文化学の境界とは：文化変容をめぐる問い

#### 4. 韓国大学における「日本」関連教育の方向性

金英順（韓国・建陽大学校教授/韓国日本文化学会常任理事）

**韓国大学の現状** 国民 14 人のうち一人が大学生という高学歴社会の韓国。4 年制大学の場合、1990 年 125 校から 2010 年には 201 校へと、この 20 年の間に 60%ポイントも増加した。しかし、2018 年には大学の入学定員(59 万名、2 年制含む)より高校卒業生数が少なくなり、以降学生数の減少が加速化し、2023 年には 4 年制大学の入学定員(44 万名)よりも高校卒業生数が少なくなる。生き残りをかけた大学間の熾烈な戦いが予想されている。

**大学における日本専攻の位置づけ** 「日本」関連の学科・学部にとってはさらに厳しい状況が続いている。高校での第 2 外国語学習において中国語選択者の著増、長期にわたる日本の景気低迷の影響による就職難によって、大学の日本関係者は入口でも出口でも苦戦を強いられている。新卒者の二人に一人は「青年失業者」といわれる韓国であるが、「日本」関連学科の就職率は全体平均をさらに下回っている。

**国立ソウル大学の「日本語文明」専攻** 1961 年に韓国外国語大学で初めて「日本語科」が設置されて半世紀が経った 2013 年、ソウル大に日本研究の基盤ができた。また、大学の教育内容、学士の中身を象徴する学科・学部の名称にも変化がみられる。2000 年頃までは「日語日文学科」がほとんどであったが、大学入試環境の変化を受ける形で「日本学科」、「日語通訳学科」、「日本地域学科」、「Global Dual Degree 学部 日本専攻」へと多岐にわたっている。日本・日本語教育の多様化、差別化戦略が進んでいることを物語っている。

**大学における日本関連教育の方向性** 上述のように激変する教育環境のなか、それぞれの大学における日本関連教育の方針、特に学士学位の中身はどのように考えられているのだろうか。現状としては、学科名や専攻別による AP,CP,DP の細分化、差異化は必ずしも明確でなく、多くの場合「日本語駆使能力と日本事情関連の知識をもった日本専門家養成」としてまとめられている。日本語運用能力を持ち日本社会に対する理解力もある、就職のためのスキルを強く意識した、即戦力としての社会人・職業人の養成に力点が置かれている。しかし各大学の教育課程をみると、ほとんどの場合、全教科の 2/3 以上が会話を含む日本語系科目で構成されている。残りの 1/3 の科目群もおよそ半分は日本文学関連の教科が占めている。「日本の政治・経済・社会・歴史・文化等の幅広い知識をもった日本専門家養成する」という教育目標から乖離しているように見受けられる。

本報告では、韓国大学における日本関連教育の動向、差別化戦略について概観する。その際、比較文化教育がどのような位置づけのなかで、どのように取り組まれてきたのかについてみていく。さらに、関連学科・学部の AP、CP、DP を手掛かりに、「韓国大学における『日本』教育の方向性」について検討する。

## 5. 台湾の日本語教育における日本事情、日本文化関係授業の現状と展望

落合由治（台湾・淡江大学教授/台湾日本語文学会理事）

現在、日本の多くの大学では文科系社会系学部に「比較文化」「比較文学」「比較言語」や「国際」「国際文化」「国際教養」等を名称にした学科が開設されているが、台湾の大学ではこうした現象は見られず、世界の各地域に関係した学科は一般的には外国語学部か応用外国語学部に位置づけられている。グローバル化の進行を同じように受け、世界経済上大きな位置を占めている日本と台湾であるが<sup>1</sup>、日本の場合は旧来の文科系社会系の学問分類の枠を「比較」「国際」というフレームで再編成しようとしているように見えるのに対して、台湾では旧来の研究の枠をそのまま残して、グローバル化に対応している。こうした学科のデザイン、カリキュラムデザインという点からも、台湾と日本では、「文化」や「国際」に対する関心の持ち方、位置付けが大きく異なっているように見える。

そこで、本シンポジウム発表では、そうした両国の枠組みの中で、以下の点を中心に、台湾と日本の「文化」「国際」理解を比較しながら、事例研究の形で台湾の日本語教育における日本事情、日本文化関係授業の現状と展望を述べてみたい。

- (1) 文科系社会系学部について日本と台湾の国立私立の学部学科組織を比較し、「文化」や「国際」に関する領域がどのように分類され、認識されているかの事例の考察を試みる。
- (2) (1) の枠の中で台湾の日本語教育の学問体系上の位置付けを探り、台湾の主要な日本語関係学科の中で日本の「言語」「文化」「社会」等がどのように学習されているかカリキュラムデザインの事例を考察する。
- (3) 台湾で行われている「日本事情」、「日本文化」関係の科目について概要を紹介し、日本語学習、異文化理解、授業デザイン、国際理解の視点から授業内容の事例を紹介、考察する。

以上のような観点によって、台湾における「文化」「国際」の概念フレームの一端を明らかにしながら、日本との比較考察を試みる。

キーワード：台湾 日本語教育 文化 国際 概念フレーム

<sup>1</sup>1人あたりGDPでアジア圏の国家で上位に位置しているのは、2011年のデータで日本17位、ブルネイ23位、香港26位、韓国34位、台湾40位である [http://ecodb.net/ranking/imf\\_ngdpdpc.html](http://ecodb.net/ranking/imf_ngdpdpc.html)。外貨準備高では、中国1位、日本2位、台湾5位、韓国7位、香港8位、インド10位である <http://www.iti.or.jp/stat/4-014.pdf>。

## 1. 文体のバリエーションと生じる印象の違いについて—日中韓の比較から—

朱文菲（同志社大学大学院博士前期課程）

日本語の文には、丁寧体、普通体といったバリエーションがあり、終助詞を使うかどうかといったバリエーションもある。日本語を使用して話す場合、適切な「スピーチレベル」の選択という問題は避けては通れない。スピーチレベルに合わせて適切な終助詞を付けることは上級になっても簡単ではない。伝える内容は同じであるが、そのスピーチレベル管理によって、聞き手に対して表している印象は微妙な違いが生じる。日本人は、様々な発話のバリエーションの中から、最も状況に合った「丁寧さ」と「親しみ」を表す表現を選択し、円滑なコミュニケーションを行っている。しかし、中国人の日本語学習者には、たとえ上級であっても、そのスピーチレベル管理は非常に難しいと思われる。

本発表では、日本語母語話者と中国人の日本語学習者のスピーチレベル管理について、日本語母語話者と中国人の日本語学習者を対象に調査し、「丁寧さ」と「親しみ」に関する両者の意識の違いを明らかにする。日本語母語話者のスピーチレベル管理においては「親しみ」や「丁寧さ」はそれぞれ独立した基準として働いているのに対して、中国人の日本語学習者のスピーチレベル管理においては、「親しみ」と「丁寧さ」が相反するものとして関係しているという仮説を立て、それを検討する。さらに、日本語と同様に文体差があることで知られている韓国語の母語話者に焦点を当て、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の比較検討も行う。

調査方法としては、上級レベルの中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者に、日本語母語話者と一緒に15分以上間会話をしてもらい、それらを文字化したものをデータとする。調査協力者には、調査の目的は告げず、できるだけ通常の会話を収集したいことを説明し、可能な限りリラックスして会話するように伝える。

最終的には、日本語母語話者、上級レベルの中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者の三者を比較した上で、特に文体使用に焦点を当てた日本語教育に対する提言を行う。

## 2. 実現系の可能表現の意味について—否定形を中心に—

林青樺 (台湾・淡江大学助理教授/台湾日本語文学会理事)

本発表は、事象の成立・不成立と主体の意図性との関係から、実現系可能表現の否定形を考察し、〈不可能〉の意味の内実を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

(1) 実現系の可能表現について、従来、動作主体の意図的行為や期待する行為の実現を表わす構文であると論じられてきた。例えば、尾上 (1998-99) と川村 (2012) はいわゆる実現系の可能表現を「意図成就」と名づけ、「やろうとしてその行為が実現したこと」、すなわち「意図した行為の意図どおりの実現」を表わすとしている。そして、「この魚は焼いても食べられなかった」のような、現実における一回的な行為の不成立を表す場合は「やってみたが、意図どおり実現しなかった」という〈意図不成就〉を述べていると指摘している。

- ① 沢野は店の中を見回し、それからひくい声で「カネあんのか?」と聞いた。ぼくは曖昧にうなずき、店の中に入ってすぐ三千円のことを言い出せなかったので、ひどく落ち着かない気分になっていた。(椎名誠『新橋烏森口青春編』)
- ② とにかく妻の誕生石として買いあたえた指輪を息子が勝手に質入れた件は不愉快だった。妻にたいしての侮辱が許せなかった。馬鹿め! 理一はなんども心のなかで呟いた。(立原正秋『冬の旅』)

例①と例②は〈不可能〉を表わす実現系の可能表現である。確かに、①のような場合は、三千円のことを言い出そうとする主体の意図が想定できるため、可能表現の否定形は、事象が主体の意図どおりには実現しなかったことを表わす。しかし、②のような場合は、「妻にたいしての侮辱を許す」ことは主体の本意とは考えにくく、主体が意図的に許そうとすることが想定されていない。したがって、実現系の可能表現の否定形を考える時には、「意図不成就」といったような、肯定形の意味を否定する(「意図成就」→「意図不成就」)ものだけでは不十分であることが明らかになった。

(2) 実現系の可能表現と自発表現について、主体が意図したかどうかの差はあるものの、実際に成立した事象を表わすという点では共通している(尾上 (1998-99))。本発表の考察結果から、両構文の違いは「意図的かどうか」というだけでなく、実際に成立しえる事象かどうかという事象の捉え方にもあることが明らかとなった。

- ③ 内藤にそれだけの情熱が残っているとどうしても思えなかった/??思われなかった。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

## 【参考文献】

尾上圭介 (1998-99) 「文法を考える 5～7 - 出来文 (1) ～ (3)」『日本語学』17-9・10, 18-1

川村 大 (2012) 『ラル形述語文の研究』くろしお出版



### 3. 『シェーン』で学ぶアメリカ文化

藤枝善之（京都外国語大学・短期大学教授）

昨今、数多くのDVDが手ごろな価格で市場に供給され、廉価版にいたってはワンコイン500円で入手できるようになっている。その映像は、文字テキストとは違って、ある地域に典型的な文化を目に見える形で描いていることも多く、その教育的価値は計り知れない。特に、著作権保護期間を過ぎたパブリック・ドメインの古い映画に関しては、教育的実践において著作権問題に触れる心配もない。本発表では、そんなパブリック・ドメインの西部劇の代表として『シェーン』（1953年）を採り上げ、異文化理解教材としての映画の可能性を探る。

1960年代までのアメリカ西部劇は、基本的に西部開拓を「偉業」と見なし、もっぱらその「功労者」を讃えた。その姿勢は、少なくとも当時の大衆の考え方を反映していたと思われる。そしてそれを根底で支えていたのは、キリスト教思想であろう。聖書の創世記によると、人間は自然界を治めることを神から命じられている。神が創造した自然を、神から委託されて人間が代わりに支配する。言い換えると、人間が自然と闘い、未開の地を拓いて人間の管理下に置くことは、神の意志なのである。その思想をよく表すのが、西部劇、中でも『シェーン』であろう。

19世紀にヨーロッパで盛んになった社会進化論は、当然のごとくアメリカに波及した。それは、科学技術の著しい進歩を背景に、人間は自然を支配しなければならないというキリスト教思想と相まって、独自の進歩史観、いわば「アメリカ型進歩史観」を生み出したと思われる。この歴史観を西部に当てはめると、西部の「未開地」は開拓され、より高度に文明化される運命にある。どんな理由であれ、開拓や文明化を妨げることは、神の意志、歴史の流れに逆らうことで許されない。流れに逆らう者、同調しない者は弾き出され、滅亡していく。—『シェーン』を含むたいの西部劇は、このような歴史観に立っているのである。

#### 4. 新入生英語診断テストの結果比較：文法項目とモチベーションに注目して

堀口誠信（徳島文理大学短期大学部教授）

徳島文理大学徳島キャンパスでは2007年から「英語診断テスト」を独自に行い、文法・語彙に関し、①時間構文、②態、③構文、④仮定法、⑤語彙、⑥動詞の形、⑦関係詞、⑧品詞のそれぞれについてどこが得意分野でどこがどのくらい弱点の箇所となるのかを「診断結果シート」として学生に返却している。このシートから、学生は全体の点数ばかりでなく、自身の弱点補強ポイントを詳しくチェックできるようになっている。

昨年度（2011年度）3クラス126人の学生に、入学直後と、英文法・語彙に特化した授業を1年間実施した後の計2回、同じ診断テストの問題を解かせ、得点上昇に関してどのような傾向が見られるかを比較・分析した（下図）。さらに、今回、別の学科でも2012年度生2クラスの結果比較のデータが得られたのでそれを加え、解説する。特に、対象学科に英文科のような、英語学習に特化した学科が存在しないため、「英語は自分の進路・就職にとって重要であると強く感じているかどうか」などのモチベーションに関するアンケートも実施し、その記録から見えてくる傾向もあわせて報告する。

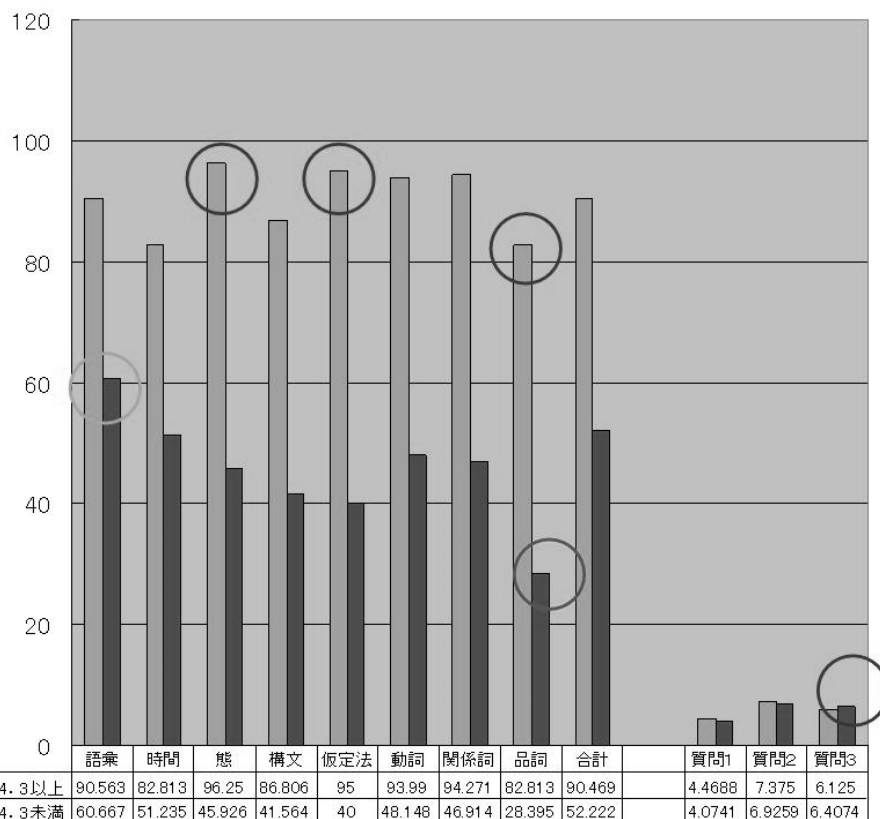
#### 項目別 各論

- ①仮定法と態
- ②品詞
- ③品詞
- ④語彙
- ⑤モチベーション

非常に伸びた  
32人  
上昇幅35点以上で  
平均点74.3点以上

あまり伸びなかった  
27人  
上昇幅15点未満で  
平均点74.3点未満

初回の平均  
48.5点  
↓  
1年後の平均  
74.3点



## 5. 台湾で市販されているオノマトペ教材の分析

江秀姿（台湾・銘伝大学助理教授）

梁蔚然（台湾・銘伝大学大学院修士課程）

オノマトペは日本語の特色の一つと言えるが、台湾において市販の専門オノマトペ教材は他の教材と比べるとそれほど多くない。教育の実態を究明するとき、教材の存在を看過してはならない。なぜなら、著者は伝えたいものを教材の編纂によって、具体化させるのである。著者が学習者に何を学習させるか、どのように身に付けさせるかということを考察することは重要であると思われる。それ故、本研究では、台湾で市販されているオノマトペ教材を分析することにより、その現状を把握し、教材作成の質の向上を目的とする。

分析手順は、まず、台湾国立図書館の検索システムで分析対象とした8冊のオノマトペ教材を選定する。次に「前書き」「オノマトペの分類方法」「教材の内容(イラスト、アクセント、中国語訳、文法説明)」「練習方法」という視点で内容の現状を考察する。

結果は次の通りである。

各教材の「前書き」の趣旨を整理した結果、オノマトペを適切に会話の中で使えると表現が自然になるため、オノマトペは日本語を学習する時欠かせない一部であると著者らは指摘している。また、絵でオノマトペを学ぶのが著者から最も認められる方法であることが分かった。

次に「オノマトペの分類方法」については、最も多く現れたカテゴリーは「気持ち」と「笑う」(6回)で、その次は「生理状態」と「歩く」(5回)である。4回現れたのは「見る」「たたく」「食べる」「飲む」「泣く」「動作」「不安」「落ちる」「輝き」「自然」の10項目である。

続いて、「教材の内容」を考察すると、イラストの使用について、8冊の教材のうち7冊イラストが使われていることから、イラストは学習者がオノマトペを学ぶときに、重要な役割を担っていると分かった。一方、教材に語彙のアクセントがほとんど付いていないという現状が見られた。また、中国語訳については、分析結果によると語彙と例文に中国語訳が付けられているのが一般的である。しかしながら、練習問題に中国語を付けるかどうかは著者らの意見が不一致であることが明らかになった。そして、文法説明については、各教材の特徴を整理すると、①オノマトペの品詞をつける、②オノマトペと共起する語をつける、③オノマトペに承接助詞をつける、④オノマトペ語源と同じ動詞を提示するという4つの形式が得られた。最後に、練習方法として最も使用されているのは多肢選択であると解明した。

## 1. 儒教の文化的伝統から見た西洋現代リベラリズムの批判的検討

### —倫理の「グローバル化」に抗じて—

白川俊介（日本学術振興会特別研究員 PD）

グローバリゼーションやグローバル化と呼ばれる現象の波はとどまるところを知らない。国境を越える相互交流は、貿易や投資といった分野のみならず、情報通信技術の移転、人の移動、ハリウッド映画やマクドナルドといった商品に代表される西洋的な消費行動やライフスタイルの普及などにもおよび、急速に拡大・深化している。そして、グローバリゼーションの影響は、単に人々の活動だけにおよぶのではなく、人々の内面的な規範や倫理観にまでおよぶ。つまり、グローバル化は倫理の「グローバル化」をもたらすのである。

その一つの例は、人権規範のグローバルな広まりに見て取ることができるだろう。人権は保護されなければならない。この一般的なテーゼに真っ向から反論する者はおそらく誰もいないだろう。ところが、保護されなければならない人権にはいかなるものが含まれるのか、あるいは、それが保護されなければならない理由、つまり正当化根拠については極めて論争的だという点はしばしば忘れられている。そもそも人権概念は、ヨーロッパという個別特殊な地域とその歴史のなかで、つまり、国家と個人に関する社会契約論的な思想伝統から生みだされてきたものである。

人権規範のグローバル化とは、必ずしも「欧米的な人権観」のグローバル化を意味しない。もう少し広い意味でいえば、倫理のグローバル化とはリベラル・デモクラシーの倫理のグローバル化ではない、ということである。かつて、フランシス・フクヤマは『歴史の終わり』において、リベラル・デモクラシーと資本主義の勝利を高らかに宣言し、そのグローバルな普及を予言した。このことは学問的には大いに批判されたけれども、その事実とは裏腹に、リベラル・デモクラシーの倫理のグローバル化という現象は弱まるどころか、むしろ強まっているのではないだろうか。その理由の一つは、非欧米的な文化的伝統に基づいて、リベラル・デモクラシーの理念に対する建設的な批判が行われていないところにあるように思われる。

このような問題意識のもとで、本報告では、儒教という東アジアにおける一つの支配的な文化的伝統に着目して、西洋現代リベラリズムの理念を批判的に検討することにある。一般的にリベラリズムにおいては、他者から独立した理性的な確固たる個人および、公／私の区分が前提とされている。それに対して、儒教の文化的伝統では、「仁」や「礼」が重視され、自律的な個人ではなく、むしろ「家族」というある種のヒエラルキーのなかに埋め込まれた個人を前提とする。そして家族関係との類推で社会を構想するために、公／私区分もあいまいである。このような儒教の文化的伝統から見て、個人の自由・人権・民主主義などというリベラル・デモクラティックな価値をどのように評価できるのかという点について比較検討を行いたい。

## 2. ラフカディオ・ハーンにおける身体と文字

藤原まみ（九州栄養福祉大学講師）

作品集『霊の日本』(*In Ghostly Japan*)において、ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn 1850-1904) それまで紀行文や小品の一部として組み込まれていた再話作品を、一個の独立した作品として発表している。そのため、『霊の日本』に収録された再話作品にはハーンの文学者としての実験的な試みがなされている。本発表では『霊の日本』所収の「振袖」(Furisode) を、この作品が依拠した実際の事件である「振袖火事」にまつわる伝説と、ハーンが愛読したゴーチエ作の「クラリモンド」(Clariomonde) を対比させながら、ハーンの文学作品世界におけるキーワードである「身体」と「文字」に留意しつつ分析し、ハーンの試みを読み解く。

### 3. 吉野作造の日本論・中国論

藤田昌志（三重大学准教授）

吉野作造は、袁世凱の長子である袁克定の家庭教師として、中国に3年(1906年(明治39)1月-1909年(明治42)1月)滞在し、欧州に3年(1910年(明治43)4月-1913(大正2)7月)留学した。吉野は天皇制下の民主主義—民本主義を主張したが、民本主義は自らの信奉するキリスト教の理想の政治的表現であり、民本主義の研究、主張は歴史を通して現れた神の認識と賛美に他ならなかった。

吉野の日本論は世界の「普遍性」との関係で展開されたものであった。本発表では民本主義関係(の背景)と明治文化研究の関係で吉野の日本論を考察する。1904年(明治37)の「ヘーゲルの法哲学の基礎」や自由民権運動を「時勢の必要」に先駆けたものとし、大正デモクラシーを「時勢の必要」に促されて起こったものであるとしたことなどに言及する。

吉野の中国論では、それが国防、政治より経済、文化を重視する日中関係論、日中提携論であったことを考察する。吉野には中国の革命党への深い信頼感が存在した。それは当時の日本の風潮とは異なり、吉野が世界の「普遍性」を革命党の中に見出したからであった。1927年(昭和2)5月、1928年(昭和3)4月の日本の対支出兵(山東出兵)については厳しく日本を批判し、北伐を支持している。吉野は民衆を指導するリーダーの必要性は認めたが、北一輝のような東洋的共和政=革命独裁には反対であった。

1923年(大正12)4月発表の「新人運動の回顧」で「自分の中に神を見て、神の中に自己を見るのである」と述べた吉野は、他者の中にも「神」を見て、自己—社会—国家を「愛慕」と「調和」、「自由」の理想状態に導くことに生涯を捧げた。

#### 4. フォート・ウィリアムカレッジにおける教育活動についての文献学的考察

倉橋愛（大阪大学大学院博士後期課程）

フォート・ウィリアムカレッジ（以下 FWC とする）は、インドのベンガル総督リチャード・ウェルズリー（Richard Colley Wellesley, 1760-1842）によって、1800年にカルカッタに設立された教育機関である。このカレッジは、イギリス東インド会社のインド派遣書記（のちのインド高等文官）に、インドにおいて行政業務を遂行する上で求められる資質を習得させることを主たる目的として設立された。インド諸語の教育・研究・出版活動が行われたことから、FWC はインド文学史において、ヒンディー語の散文形式の普及に貢献した組織であると解されている。

今回の発表では、まず初めに FWC がどのような組織形態をとっていたのかについて概説する。そしてその上で、FWC で行われていた教育活動について説明する。主に取り上げるのは、開講された科目、学期制、履修制度、全学演習討議等についてである。当時のイギリスの大学制度との比較等も交えながら、FWC の教育活動の特徴について考察していきたい。参考文献としては、イギリス議会文書等を用いることとする。

FWC では行政関連科目や言語関連科目が開講されたが、主に開講されていたのはインド諸語科目（アラビア語、ペルシア語、サンスクリット語、ヒンドゥスターニー語、ベンガル語、テルグ語、マラーティー語、タミル語、カンナダ語）であった。行政関連科目と言語関連科目の中でインド諸語科目が主な開講科目となったのには、イギリス東インド会社の取締役会から FWC 設立への支持を得られなかったことが関係していたと考えられる。

また、入学者数の内訳を月別に見てみると、入学する月は入学者によって異なっており、このことから FWC への入学時期は不定期であったようだと考えられる。学期制に関しては、4 学期制という珍しい学期制が採用されていた。入学時期や学期制においてこうした特徴が見受けられるのは、FWC が文官を養成し輩出するための組織であったためであると考えられる。

FWC においては学位制度も採用され、修了した学生は卒業証書を授与された。しかし単位制度に関しては、受講科目に合格するための試験は実施されていたものの、当時のイギリスの大学と同様に、まだ採用されていなかったようである。但しスカラシップ制度は設けられており、このことに関しては当時としては先駆的であったと言える。年 1 回のペースで実施された全学演習討議(public disputation)では、FWC で開講されていたインド諸語でのディベートが学生らによって行われ、日頃の学習の成果を示す機会となった。この全学演習討議ではディベートの他に総督によるスピーチや成績表彰等も行われていたことから、全学演習討議は学生や教職員らにとって一大イベントであったと言える。

## 5. 米国におけるキンセアニェラの浸透—メキシコ文化の混淆性

塚本美穂 (京都外国語大学大学院後期課程)

2007年の米国でのサブプライムローン問題で、世界は経済的危機に直面した。そのローン問題の根底には、ヒスパニック層や黒人層などの低所得者向けローンが住宅融資に絡んでいるとされている。米国の低下層に位置する人々はローン地獄にあえぎ、特に経済的に貧困層が多いヒスパニック移民者の経済問題は、米国経済に大きな影響を与えている。

現在、米国人口のうちヒスパニック人口は13%を占めており、経済的だけでなく文化的にも米国社会に大きな影響を与えつつある。その一例である、ラテンアメリカ諸国から米国文化に浸透したキンセアニェラ (Quinceañera) について論じることとする。

キンセアニェラとは、スペイン語の15歳の少女たちが大人の女性になることを祝うもので、日本の成人式にあたるが、少女のみを対象としたという点では、成人式とは異なる。キンセアニェラでは、リムジンに乗った少女が、美しいドレスを身にまとい、男の子のエスコートでパーティ会場に入り、父親に引き渡される。父親とダンスした後、父親は、娘が身に着けていた平らな靴とハイヒールを交換して、ティアラを娘の頭上に乗せる。そして娘が幼少時の最後に所有していた人形を受け取ることが、典型的な儀式だとされている。キンセアニェラの象徴となる人形の放棄、ヒールとティアラの獲得は、少女時代に別れを告げて女性へと変化する表れの象徴となる。キンセアニェラは年々華美になっており、低下層のヒスパニックには大きな軋轢となっていることも事実である。

これまでキンセアニェラに関する小説には、マリン・アレグリア (Malin Alegria) のフィクション作品『エストレージャのキンセアニェラ』 (*Estrella's Quinceañera*, 2006)、映画では『キンセアニェラ』 (*Quinceañera*, 2006, 米ソニー・ピクチャーズ配給) があるが、キンセアの現況について調査された資料は少ない。そこで、ラテンアメリカ作家フリヤ・アルバレス (Julia Alvarez) のノンフィクション作品『昔々のキンセアニェラ/米国での成人』 (*Once Upon a Quinceañera: Coming of Age in the USA*, 2007) の調査資料を基に、キンセアニェラの現況およびキンセアニェラに関わる人々の考え方を考察する。

キンセアニェラが日本ではあまりなじみがないため、米国において浸透してきたことはあまり知られていない。そこで本発表では、キンセアニェラにおける経済問題、文化的問題、文化の混淆性を検討して、米国社会におけるキンセアニェラの位置づけを論じたい。



## 6. 飲酒のアポリアからの脱却—禁酒運動と映画の近代化—

長谷川詩織（愛知教育大学教育創造開発機構研究員）

本研究は、19世紀末に登場した映画が、隣接する諸領域と絡み合いながら、教育的・道徳的言説を組み込み、語りの技法の革新を実現する過程について、1909年にバイオグラフ社が公開した作品を中心に考察するものである。20世紀初頭、安い入場料で楽しむことができる労働者の娯楽として、映画は規模と影響力と両方を増していく。映画が存在感を増すまさに同時期、移民労働者が仕事を求めて都市部に流入、日常的な飲酒文化の浸透が加速する。19世紀末から20世紀初頭にかけて、禁酒運動の最も強力に推し進めたのが、反サロン連盟（Anti-Saloon League）である。反サロン連盟は、1895年末に結成された、教会を基盤とする組織で、政党から一線を引く新しいタイプの政治的機関である。反サロン連盟は、飲酒による生産効率の低下と労使紛争時の過激な行動を危惧する産業資本家が、財政的に支援したこともあり、全国禁酒法発行に至るまで大きな影響力を示した。その機関誌『アメリカン・イシュー』は、飲酒を通じて人間の生活が破綻するまでの経緯を冷静な眼差しのもと紹介、「負の連鎖」の起点であるサロンを排除することの正当性を示した。

1909年は、産業内自己検閲が確立し、映画の近代化が急速に進んだ時期である。禁酒運動は、飲酒が人間の身体あるいは精神状態にどのような影響を与えるのか、労働意識、道徳心、家庭環境をいかに変容せしめるのか、観客に対して強く喚起する題材を提供した。禁酒運動に内在する教育性・道徳性は、映画の社会的地位の向上に寄与するのみならず、メッセージを伝えるためにどのような編集・演出がありうるのかを問いかけ、「語り」の技法に革新をもたらす刺激としても機能した。さらに禁酒運動は、映画と学術的な領域の交差を推進する格子としての役割も担った。禁酒運動は、医学、心理学、経済学、家事科学など複数の学術領域と連携、その言説は合衆国の近代性を象徴した。その近代的性格は、登場して間もない映画が、新たな位相を獲得しようとするとき最適の視座であった。

本研究では、まず、映画を健全な娯楽として社会にアピールする過程で、サロンの存在をどのように取り上げ、飲酒と映画鑑賞とをいかに比較したのか、同時代の映画業界誌を始めとする資料の分析を通じて浮かび上がらせる。そのうえで、最初に、1909年の『飲んだくれの改心（*A Drunkard Reformation*）』を取り上げ、教育を通じて断酒に導くプロセスを家庭言説の見地から論じる。次に、宗教的示唆を伴わせながら社会問題を扱う過程で、飲酒と贖罪行為がいかに結び付けられたのか、同年の『小麦の買い占め（*A Corner in Wheat*）』を通じて考える。飲酒を否定的に捉える上記2作品と比較するため、サロンの公共的な役割を強調する、同年の『淋しい別荘（*The Lonely Villa*）』の救出劇を分析する。同時代の諸言説の重層性を踏まえながら、どのような力学のもとサロンから映画鑑賞へと娯楽機能が移行し、初期映画から物語映画に至る主題的・形式的革新が促されたのか、上記の作品分析を通じて明らかにすることを目指す。

## 1. ハムレットが語るエリザベス朝演劇の変化

浦千里 (関西大学大学院後期博士課程)

シェイクスピアの『ハムレット』(1602) 3幕2場は、ハムレットが旅役者達に対してこれから行われる劇中劇の指導をする場面から始まる。父の亡霊が現国王である叔父クロードィアス (Claudius) によって毒殺されたと語った言葉が真実である事を確かめる為、ハムレットは先王暗殺の模様を織り込んだ劇を「鏡」として、クロードィアスの本当の姿を映し出そうと言うのである。この演技指導に見られる特徴は、ハムレットが「いいな、台詞は、さっきおれが聞かせたように」(“as I pronounc'd it to you”) (3.2.1-2)と述べる様に、その台詞が既にハムレットによって旅役者達に朗読されているにも拘らず、39行もの長さで延々と演技指導が行われる不自然さである。本発表では、3つのキーワード、「ヘロデ王とターマガント」、「鞭」、そして「鏡」を通して、不自然に長いセリフが述べられる真の目的を考察していく。

ハムレットは役者たちへの指導の中で、悪い役者の例として、ユダヤのヘロデ王や回教徒の神ターマガント (Termagant) を引き合いに出して説明する。ヘロデは、聖史劇において自己顕示欲が強く、無知で、うぬぼれの強い暴君として登場する。また、ターマガントは、キリストや聖者の行った奇跡を題材とした奇跡劇に横暴で騒々しい神として登場する。この二人を通して、ただ騒がしいだけの、派手な、時には客と掛け合いで即興をする、台本どおりに演じない当時の役者への批判がなされる。更には、聖史劇、奇跡劇は中世から16世紀半ばまで人気が続いたが、シェイクスピアの時代には衰退し始めており、その様な時代遅れの劇を未だに行う役者への揶揄も示唆される。

この様な時代遅れの役者に対して「ああいうやつは鞭でひっぱたいてやりたくなる」(“I would have such a fellow whipp'd for o'erdoing . . .”) (3.2.12) と、ハムレットは過激なセリフを吐く。「鞭」は、当時風刺詩人として知られ、少年劇団への作品も提供した John Marston (1576-1634) の『役者への懲らしめ』(*Histrionastix, Or The Player Whipt*) (1599) への言及であると考えられる。サブタイトルが示す様に、シェイクスピアも属していた職業的成人劇団への風刺を目的とした作品である。このハムレットのセリフの「鞭」は、作品の題を振っての風刺への応酬であろう。この背景には、アマチュア的性格の少年劇団との対立 (劇場戦争) がある。当時、少年劇団は知的洗練を前面に出して、成人劇団を脅かすほど隆盛を極めていた。このセリフには、洗練された演劇を望む観客層の嗜好の変化に付いていけない低いレベルの役者たちへの批判が込められている。

クロードィアスの本当の姿を映し出すには、これまで述べた様な中世的時代遅れの役者の演技ではなく、「鏡」によって映し出される様な真実に近い演技でなければならない。時代も観客もそれを要求し始めているのである。ハムレットのセリフの真の目的は、時代が要求する新しい演劇像を示すことにあったと言える。

## 2. 『ボヴァリー夫人』におけるジェンダー構造の考察

—エンマの「男性化」、シャルルの「女性化」に焦点をあてて—

水町いおり（名古屋市立大学大学院博士後期課程）

本報告で取り上げるギュスターヴ・フロベール（Gustave Flaubert 1821-1880）著『ボヴァリー夫人』（フランス語原題 *Madame Bovary*, 1857年）は、フランス19世紀リアリズム小説の傑作とも称される作品である。ロマンティックな甘い感傷と夢のような結婚生活に憧れて田舎医者シャルルと結婚した主人公エンマが、単調な現実生活と夫の凡庸さに幻滅し、甘い夢を追って不倫をし、借金を作り、最終的には服毒自殺をするという物語である。

報告者は、以前、拙稿「ボヴァリー夫人をめぐる一考察」<sup>2</sup>の中で、主人公エンマの「男性化」<sup>3</sup>する姿に着目して、同作品のテキスト分析を試みた。その中で、エンマの「男性化」の過程には、「自己解放」と「自己否定」という二面性があること、エンマの「男性化」は、『ボヴァリー夫人』の時代背景である七月王政期（1830-1848）のジェンダー的諸問題を内包する可能性があることを示した。そこで、本報告では、『ボヴァリー夫人』のもう一人の主人公であるシャルルに着目し、シャルルの「女性化」についてジェンダー的視点から考察を試みる。

シャルルは愛する妻エンマに気に入られたい一心で、エンマの言いなりになり、懐柔され、不倫のために外出する妻を疑いもなく信じて待っている。このようなシャルルの振る舞いは、家父長的で保守的な規範性を有する七月王政期の社会的特徴と相反するものである。報告者は、このようなエンマとシャルル関係性について、社会通念上におけるジェンダーロールが逆転しているかのような印象を持った。それゆえ、エンマの「男性化」、シャルルの「女性化」という言葉を用いて、両者の性役割の逆転を表現している。

多くの女性たちが居場所を家庭内に限定され、離婚する権利も持たず、社会で働くことも望まれず、「家庭の天使」の役割を必然的に担わされ、良妻賢母になることが求められていた時代に、エンマが「男性化」し、その夫のシャルルが「女性化」する意味はいかなるものであったか。

本報告では、公共圏におけるジェンダーロールが親密圏では逆転することを記した作者の意図、当時の社会背景、テキストにおける表象分析などを通して、エンマの「男性化」、シャルルの「女性化」の意味を探り、『ボヴァリー夫人』のジェンダー構造を明らかにしていきたい。

<sup>2</sup>野田（水町）いおり著『人間文化研究』14号、2011年、p. 37 - p. 53。

<sup>3</sup>ここで使用する「男性化」とは、主人公エンマが男物の服を着たり、男のような言葉遣いや振る舞いをした様子を、筆者が「男性化」と定義したものである。

### 3. Eugene O'Neill、苦悩と悲哀の表出手法—*The Sniper* と *Shell Shock* を中心に—

伊藤佳世子(京都大学非常勤講師)

ノーベル文学賞を受賞しアメリカ演劇の父と称されるオニール (Eugene O'Neill, 1888-1953) は約 50 作の戯曲を遺した。その中で戦争が登場人物の人生に大きく影響を与える戯曲は *Strange Interlude* (1928) と *Mourning Becomes Electra* (1931) があるが、戦地での出来事だけを採りあげた作品は *Shell Shock* (1918), *The Sniper* (1917) だけである。両作品とも一幕劇である。*The Sniper* では戦地での非情さや不条理に絶望する老人を描き、また *Shell Shock* では戦地で肉体的また精神的に深刻なダメージを受ける陸軍歩兵隊少佐を中心に描写している。本発表では両戯曲の手法を比較しながら、オニールは戦場の過酷な状況をどのような工夫をして舞台上で表出したのか、また肉親や恋人また知人の命を剥奪される悲しみとは登場人物にとってどれだけ深いものであるかを観客に感じ取らせるためにどのような工夫をしたかを述べる。さらに両作品を通して、ある登場人物は何故死ななければならなかったのか、また神から与えられた試練というものが存在するのであればその試練に対してオニールはどのように考えまたその意味を見いだしたか否かについて考察する。

## 4. ノア・ウェブスターのリベラル・エデュケーション論：若者論・女性論の一側面

高橋貴之（公務員試験協会講師）

本報告は、18世紀末期から19世紀前半に活躍した教育思想家ノア・ウェブスターのリベラル・エデュケーションに関する議論を、彼の若者論や女性論を吟味することによって説明するものである。

従来、18世紀後半のアメリカ社会思想は、政治論や経済論、社会体制論に重点が置かれてきた。半面、個別の思想家の着目した論点の重要性を認識し、かつ、個別的な人間のあり方に着目する契機としての、教育論・教育思想は脇役にされがちであったことは否定できない。近年の注目すべき建国期（18世紀後半）のアメリカの社会思想史研究として、田中秀夫『アメリカ啓蒙の群像』（2012年）がある。田中は、アメリカ啓蒙思想のコンテクストにおいて、従来はあまり振り返られることがなかった、ノア・ウェブスターの思想の重要性を示唆した。

ウェブスターは、政治論、経済論、社会体制論を幅広く論じた思想家である。それらにとどまらず、彼は英語の文法書や英語辞典の編集を手がけ、その影響力は我が国の明治期における英語教育にも多大な効果を与えた。ウェブスターの思想のキーワードの一つになったのが、リベラル・エデュケーション（liberal education）のあり方である。当時のアメリカの思想状況では、ウェブスターの考えは、「有徳性」「虚栄心」「名誉」といった公共の秩序に関わる言葉と切り離せなかった。また、アメリカという国民国家の形成に資する人民の鍛造をするという一面を免れなかったため、有徳な知的政治エリート階層と、農工商の三部門の産業を担う生産階層とを分かち契機をつくった、保守的な教育思想家という評価をされることもある。

ウェブスターは、政策的な発想から、政治エリート階層と生産階層とを分かちただけが目的であったのだろうか。そもそも若者というのは、次の世代のアメリカ社会を担う主体のことであるし、「共和国の母」と言われた女性について言えば、公民権は認められなかったものの、経済における生産主体・消費主体としては無視できぬ力を持っていた。こうした人々の個々の能力を引き出そうと努力したのが、ウェブスターのキーワードであった、リベラル・エデュケーションであったはずである。本報告では、ウェブスターの思想の一面についてではあるが、その評価に一石を投じてみたい。

## 5. ジョーゼフ・キャンベルと東洋神話

澤智恵（早稲田大学非常勤講師）

ジョーゼフ・キャンベル(1904~87)ほど、幅広く人気を集めた神話学者はいないだろう。キャンベルの英雄神話研究が、ジョージ・ルーカスの制作した映画「スター・ウォーズ」(1977)の着想に大きな影響を与えたことはよく知られた事実である。また、キャンベルの最晩年にテレビ放送されたビル・モイヤーズとの対談は、全米で大きな反響をよんだ。この対談を書籍化した *The Power of Myth*(1988)は爆発的な売れ行きを示し、人々の間に一大神話ブームを巻き起こしたのである。日本においても、この対談はNHKで何度も再放送されるほどの好評を博し、訳書『神話の力』(早川書房)は版を重ねていまだに読みつがれている。

このように多くの人々を魅了したキャンベルの神話研究であるが、エリアーデやレヴィ＝ストロースなど同時代の神話学者に比べると、ほとんど学術的な研究対象とされてこなかったといってよい。それは、キャンベルの研究が神話学のみならず、哲学、宗教学、心理学、文学、文化人類学、歴史学、考古学、自然科学など、じつに広範囲にわたる該博な知見を縦横に駆使した、壮大な知的営為であるからというのが大きな理由だろう。それゆえ、キャンベルの神話論には学問的厳密さや一貫性に欠けるきらいがあるという批判が専門家によってなされてきた。

とはいえ、神話学自体、もともと領域横断的な性格の強い新しい学問であり、厳密な研究手法が確立しているとは言い難い。また、それまでのごく一部の研究者の関心対象にすぎなかった神話を、多くの人々にとって、より身近で魅力あふれる読み物として紹介したキャンベルの功績は評価されるべきである。かれが現代人に提示した、神話のもつ新たな可能性を検証していくことは、神話研究のさらなる発展のために意義あることのように思われる。

このような問題意識のもと、本発表では、キャンベルの神話論のなかで、西洋神話との比較対象として重要な役割を担った東洋（具体的にはインド・中国・日本）神話の研究に焦点を絞り、その特質について考察する。かれの神話研究のあゆみを概観すると、初期の段階では東西神話の類似性の発見に力点が置かれていたが、徐々に東西の相違点が重視されるようになっていくという特徴が見出される。

したがって、本発表ではキャンベルの最終到達地点である最晩年の著書に照準を定め、かれが東洋神話をどのように評価し、それを自身の神話論のなかでどう反映させていたのかを探る。キャンベルの神話研究における東洋神話の意義を検討することによって、かれの神話論の本質に迫りたい。

## 6. 心の支援の構造に関する考察(7)

### 一心の支援の基盤レベルと対応レベルの関係性をめぐって—

佐藤静 (宮城教育大学教授)

#### 1. 問題と目的

佐藤 (2007,2010,2011a) は、科学領域から宗教領域まで含む広範な支援方法 (アプローチ) を想定した心の支援の構造モデルを提示し、事態や状況の困難さの度合い (状況差) と支援方法の変化との関連性について実証的検討を行って、両者が互いに排他的ではないことを示した。さらに、佐藤 (2011b) が提示した心の支援のレベル構造と心の支援の構造モデルを比較して、支援者の世界観・人間観を反映すると考えられる基盤レベルと個々の問題領域・支援領域ごとの対応レベルの関連性について検討した (佐藤, 2012)。今回の目的は、基盤レベル (世界観) と対応レベル (方法/アプローチ) の関連性についてさらに考察を進めることである。

#### 2. 世界観と方法 (アプローチ) の関連性

心の支援は問題領域ごとの対応レベルとそれを支える基盤レベルの二層構造をなしており、それらは相互に関連していると考えられる (佐藤, 2011b, 2012)。基盤レベルは支援者の世界観を反映すると考えられるが、基盤レベル (世界観) と対応レベル (方法/アプローチ) は必ずしも固定的に規定・限定されない可能性がある。

例えば、雪の研究で知られる科学者・中谷宇吉郎 (1900-1962) は、郷里の伝説や『西遊記』等の物語に夢中になった子ども時代を回想して、「自分の子供の頃の経験から考へて、思ひ切った非科学的な教育が、自然に対する驚異の念を深めるのに、案外役に立つのではないかといふ疑問がある。幼い日の夢は奔放であり荒唐でもあるが、さういふ夢も余り早く消し止めることは考へものである」(中谷, 1946, p.357)、「碧の湖の岸に建ってゐる白い塔の中に、金髪の王女が百年の眠りを眠ってゐる。少年の日にその姿を現実の形に見ることの出来た人が、案外科学上の新分野を開拓して、新しい日本の存在意義を世界に示すやうなことになるかもしれない」(同, p.359)と述べている。中谷は、非科学的な物語が提供する驚異 (wonder) の感覚は、自然・世界の驚異に感応する科学者の心性に通底するものとして重要であることを提言している。すなわち非科学的世界観に親近感や親和性をもった者が、科学的思考・方法によって優れた科学的探求を行う可能性が述べられている。このことは、基盤レベル (世界観) と対応レベル (方法/アプローチ) の柔軟な関係性と相互の独立性を示唆するひとつの事例と考えることができよう。

科学的方法論が用いられる心理臨床領域においては、支援対象者の心的リアリティが根ざす世界観は働きかけ (方法/アプローチ) の際の重要な要素であり、支援側はそれを理解・共感し、尊重する必要がある。伝説や神話等の物語の背景をなす非現実的世界観は、科学的合理思考が求める客観的世界観とは異なるが、私たちの生 (life) のあり方を考えた場合、そこに正・誤という判断基準を適用して排他的に結論づけた対応をすることは生態学的な妥当性を欠くと考えられる。むしろ、生 (life) の過程から生じる心的リアリティとつながる多様な世界観の併存可能性と対応方法/アプローチの選択可能性 (柔軟性) が重要であり、本論のテーマを考察する上での手がかりになると考えられる。

[文献] 中谷宇吉郎 1946 簪を挿した蛇, 現代随想全集第 10 巻, 創元社, 1953. / 佐藤 静 2007 心の支援の構造に関する考察, 比較文化研究, No.77, 85-95. / 佐藤 静 2010 心の支援の構造に関する考察 (III), 比較文化研究, No.91, 17-26. / 佐藤 静 2011a 心の支援の構造に関する考察 (IV), 比較文化研究, No.98, 95-102. / 佐藤 静 2011b 日本心理臨床学会第 30 回大会自主シンポジウム「心理臨床と信仰(3)」配布資料. / 佐藤 静 2012 心の支援の構造に関する考察(6), 比較文化論, No.30, p.24

## 1. 九鬼周造と、2人の父—彼らは〈いき〉な男だったのか？—

横地徳広（弘前大学専任講師）

京都学派と呼ぶには思想的にためらいも覚えないわけではない哲学者・九鬼周造の主著『「いき」の構造』（1930年）は、当時では珍しく、苦界に生きる遊女の善美な共生を哲学的に明らかにしていた。この考察には、周造の母はつが存在が色濃く映し出されているのだが（註1）、その周造には2人の父がいた。はつの夫である実父の九鬼隆一と、はつと不倫の関係にあつて周造が「精神の父」と思い起こす岡倉天心のことである。明治の美術行政で上司と部下の関係にあつた隆一と天心の放埒な生き様は、2人のあいだではつを苦しめ、しかし、そうしたはつの姿を間近で見ていた周造も、女性関係では〈いき〉な遊びぶりを見せ、離縁も経験している。

周造の精神的成長に強い影響をもった隆一と天心、そして周造本人の女性関係は、『「いき」の構造』の成り立ちといかなる関係をもったのだろうか？

この問いを考えていくとき、『「いき」の構造』で論じられた遊女と町人の善美な共同存在には、彼ら3人のそうした女性関係との相互照射をほどこすことが必要となってくる。本発表では、このような相互照射を通じて周造が哲学的地平で彫琢した〈いき〉概念の内実をあらわにする。その結果、遊女に注目が集まりがちな『「いき」の構造』の哲学的主張を、男性の観点から再検討し、〈いき〉概念のもつ豊かさを示すことができるはずである。

註1 この点については、「九鬼周造とその母」（日本比較文化学会、中部支部第3回研究会、静岡労政会館、2012年9月22日、口頭発表）で論じたことがある。



## 2. カズオ・イシグロの *The Unconsoled* における父親

—父子関係と祖父孫関係を比較して—

武富利亜（九州大学大学院博士後期課程）

カズオ・イシグロは、長崎県で生まれ、五歳のころに英国へ移住するという環境の中で育ち、英国を代表する新進気鋭の作家となった。こうした体験に関連した先行研究では、イシグロ自身の〈家〉に対する執着、或いは〈帰属意識〉を考察したものが多くみられる。本研究発表で焦点をあてる、*The Unconsoled* は、Franz Kafka の *The Trial* や *The Castle*、Fedor Dostoevsky の *The Possessed* を比較材料に考察したものと主人公 Ryder の理想化された人物と実際の自分(Ryder)との分裂を指摘した論文は数多くあるが、イシグロの作品中に表現される家族間関係に注目して、その特質を検討したものはほとんどない。

イシグロは、これまでに6作の長編小説を出版している。第4作品目として出版された *The Unconsoled*(1995)は、日本を舞台にした第1作(*A Pale View of Hills*)、第2作(*An Artist of the Floating World*)、イギリスを舞台にした第3作(*The Remains of the Day*)と一線を画している。物語の舞台は、中央ヨーロッパのどこかの都市ということは推測できるが、具体的には示されない。また、イシグロは、前三作品に用いていたリアリズム的な手法から本小説においては、実験的な超自然主義的な手法を用いるなど新しい試みを実践している。

*The Unconsoled* は、夢の中でものごとが起きているような、非現実的な世界で展開される。主人公の Ryder は、世界的なピアニストで“Thursday Night”というイベントに出演するためにこの都市を訪れる。そのイベントが行われるまでに Ryder は様々な人間と出会う。Ryder は、それぞれの人間から家庭内の悩みを打ち明けられ、その悩みを解決するために助力して欲しい旨を依頼される。しかし、結局は誰も、なにも、解決をみることなく終わってしまう。Ryder 本人も“Thursday Night”さえ実現させられないまま、次の目的地であるヘルシンキへと向かうことになる。

先行研究において、Ryder の過去の投影がボリスで未来に対する不安の投影がブロッツキーであるという指摘がある。本発表においては、その指摘を土台に更に探究し、イシグロが従来描いてきた支配的な父親と抑圧される息子とは逆の、子どもが父親の精神的支配者となっている構図に着目する。Ryder を中心とした人間関係、特に父子関係と祖父孫関係を比較することで明らかになる〈時の流れ〉という無常の要素と〈父親〉に対する特別な感情を浮き彫りにしたい。

### 3. 坂口安吾「犯人」試論

黄如萍（台湾・国立高雄餐旅大学助理教授/台湾日本語文学会事務局長）

「犯人」は昭和二十八年一月『小説新潮』に発表された小説である。

この作品は、戦時中、犯人当てゲームに熱中し、古今東西の探偵小説を読破していた安吾が書いた小説群の一つである。

研究史において、奥野健男は「「犯人」は哀切な物語である」<sup>4</sup>と述べ、また矢島道弘はこの作品が「人間関係の怪奇さを描いた」<sup>5</sup>ものだと述べた。さらに、庄司肇は「心理の微妙さを中軸にすえた作品」<sup>6</sup>だと論じた。この作品に関して本格的な作品論はまだないが、推理小説という側面を持ちながら研究史の中では文学作品的な評価を受けて、部分的に触れられていることが分った。

この作品は山奥の村で起きた殺人事件から始まる。被害者は日蓮の女行者のサヨという人である。死体を調べたのは人見医師である。犯人が分からないため、発見者の仁吉少年が再び取り調べを受けた。後日、検死の際に、トランプのハートのクイーンを拾ったという情報があるため、人見が容疑者として新聞に報じられた。その後、様々な調査が行われた結果、仁吉の自供によって事件は解決する。

本論では、「犯人」という作品を作品論として読み解くことを優先する。そして、その分析を進めていくことで、推理小説のスタイルを採りながら作者の文学創作的営為を貫く、文学者としての姿勢という基本的方向性が見い出せることを指摘する。

キーワード：坂口安吾 推理小説 作品論

<sup>4</sup>「解説」『坂口安吾全集五』昭和四十四年五月、冬樹社。

<sup>5</sup>『相反する情念—坂口安吾の世界—』昭和五十八年三月、近代文芸社。

<sup>6</sup>「底流としての風狂」『芸術至上主義文芸』昭和五十九年十一月。後に『坂口安吾論集成』平成四年十月、沖積社に収録。

## 4. パンソリの語りにみる「悲壮」と「滑稽」の共存についての一考察

崔秀蓮（九州大学大学院博士課程）

韓国の語り物芸能であるパンソリの代表的な演目には、<sup>チュニヤンガ</sup>「春香歌」、<sup>シムジョンガ</sup>「沈清歌」、<sup>フンボガ</sup>「興甫歌」、<sup>スグンガ</sup>「水宮歌」、<sup>チョックピョックカ</sup>「赤壁歌」があるが、どれも明確な構成とディテールを持った物語であり、語りに際しては物語の展開のためそれぞれに工夫がなされる。しかし、一曲の中であるとき、感情表現が際立って高められていき、物語展開するよりも、感情表現がそれ自体で自己目的化するような状況に至ることがある。日本の義太夫節など感情の直接的な表現を重視する語り物は他にもあるが、多くは登場人物の心情を代弁するための感情表現にとどまっている点でパンソリのそれと異なるように思われる。パンソリのこの特徴的な感情表現の場面では、「悲壮」と「滑稽」が著しく敏速に転換しながらも共存しようとする動きがみられる。パンソリの語りで「悲壮」と「滑稽」が共存する背景には何があるのか、本報告は、パンソリの談話構造の分析と歴史資料の検討によってパンソリにおける「悲壮」と「滑稽」の関係性を明らかにし、韓国の語り物芸能の理解、延いては日韓語り物芸能の比較検討に役立てようとするものである。

パンソリの語りにおいて激しい感情表現とその中で起こる「悲壮」と「滑稽」の共存及び転換がどのような状況で起こるのか、まず談話分析を通してパンソリの語り口を10種類に分類し、より詳しく検討した。パンソリの語りで描写される対象は大別して風景と人物があり、このうち人物は聴衆に共感される人物か敵対する人物か、さらに人物中心の時には行動の描写か心情の描写かに分類され、またこれらの場面状況は主観的に語られる場合と客観的に語られる場合がある。パンソリでは演者の感情表現が高められていくとき、聴衆は積極的に声を発しながら呼応する。演者は、聴衆との交感を語り口にフィードバックさせ、聴衆を巻き込んだ感情のうねりを生じさせる。そこで、本研究では、パンソリの演者と聴衆間に起こる積極的なコミュニケーションの特徴も踏まえ、強い感情表現が、上記10種類の語り口のうち、どの状況で起こるのか、録音資料の分析を通して検討した。その結果、激しい感情表現は、作中の人物の心情が描かれるような状況で、それを演者が役者として主観的に演じる場合にみられること、またそのような場面は、夫婦や親子の離別や、生死に関わる貧困など壮絶な「悲壮性」を帯びていることがわかった。したがって、パンソリでは悲壮的な場面が物語の核心をなしていることは疑う余地がない。しかし一方で、パンソリの語りで悲壮的な場面の前後に、滑稽な場面を挿入することが多い。パンソリの語りで、この相反する悲壮と滑稽の転回の中に、物語がつむがれていく。悲壮と滑稽がこのように共存する背景には何があるのか。本発表では、次に、テキストの分析に加えて歴史資料の分析によりその理由を検討した。

パンソリが現れ始めた17世紀は、朝鮮王朝において<sup>セド</sup>「勢道政治」が台頭し身分制が揺らぐなど下層民の文化が形成され始めた時代である。パンソリの語りには、この時代に生じた上層民と下層民の身分の軋轢が背景にある。

テキスト分析の結果、パンソリの物語では絶えず、<sup>ヤンバン</sup>両班と庶民のような、「伝統的で保守的なもの」と「非伝統的で開放的なもの」という相反する性質をもつ役柄が登場し、この不整合な役柄が物語のなかで接触するとき悲劇を齎すことがわかった。しかし一方で、このような極度の緊張状態に至ることを回避し、共感する人物とは対照的な役柄を登場させ意味の中心から絶え間なく脱却しようとする「滑稽」な場面も共存する。パンソリにみられる悲壮と滑稽の共存は、まさに上記のような展開の中に可能になると考察される。本報告では、パンソリの談話状況の具体例も示しながら「悲壮」と「滑稽」の関係性をモデル化し、日本の語り物芸能との比較に供したい。

## 5. マルセル・ブロータースの作品が提示するカテゴリーの境界

## —人間・美術・文化の観点から—

利根川由奈（京都大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）

ベルギー出身の現代美術家、マルセル・ブロータース（Marcel Broothoers, 1926-1976）は、カテゴリーがいかにか形成されるかについて問題提起する作品を多く制作してきた。そのような作品の例として《大鍋のムール貝（Grande casserole de moules）》（1966年）が挙げられる。この作品では、ベルギーで日常的に使われるムール貝用の鍋（casserole）に、鍋の蓋が閉まらないほど多くのムール貝の殻が詰められている。そのためこの作品は、ベルギーの伝統料理であるムール貝の白ワイン蒸しを鑑賞者に想起させるだろう。従来この作品を巡る議論は、ウィレム・イライアス『1945年以降のベルギー芸術の概観』（2008年）に示されているように、ベルギー的ローカリズムの視点に基づく解釈がほとんどであった。具体的には、ムール貝が提示するアイデンティティの問題—貝殻という固い外枠に沿って内部の軟体部が形成されること—と、ベルギー人のアイデンティティの問題—ベルギーは比較的新しい国家であり（1892年独立）、国内は独立した時から実質的な分裂状態にあるため、「ベルギー人」としてのアイデンティティを獲得することが難しいと思われること—を関連付けて論じる解釈である。

しかし、《大鍋のムール貝》をローカリズムの視点からのみ眺めることには疑問が残る。なぜなら、《大鍋のムール貝》は「ベルギー人」のアイデンティティだけでなく、「美術」や「文化」といったカテゴリーを規定する境界にも揺さぶりをかける作品だと考えられるためだ。その理由として、たとえば「美術」のカテゴリーについては、ムール貝の殻を生活用品である大鍋に入れて美術館に展示したことによって、《大鍋のムール貝》はそれまで区別されていた生活の場＝家と、公の場＝美術館の境界線を曖昧にした作品と考えられる点、本来廃棄されるはずのムール貝の殻に新たな意味を付与し、作品にしたことで、廃棄物が芸術作品になる可能性を示した点、が挙げられるだろう。この見方は、ブロータースが芸術制作の基盤にマルセル・デュシャンやルネ・マグリットなどの美術作品の在り方を問い直した芸術家たちを据えたことを鑑みれば、越権ではないと思われる。

よって本発表では、「人間」、「美術」、「文化」に関してブロータースの《大鍋のムール貝》が提示する問題の検討を通して、彼はなぜカテゴリーの境界の揺らぎを想起させる作品を制作したのか、を明らかにすることを目指す。

6. *The Moorchild*: 現代アメリカファンタジーにおける伝承的モチーフ

川越ゆり (東北文教大学短期大学部准教授)

本発表の目的は、アメリカの児童文学作家、Eloise McGraw の *The Moorchild* (1996) の分析を通して、現代アメリカにおける創作ファンタジーに、伝承的なモチーフがどのように取り入れられ、今日的な意義を獲得しているのかを考える一助とすることである。

*The Moorchild* は、古い時代のアイルランドを思わせる村を舞台に、「取り替え子」(“changeling”)のモチーフを取り入れて展開する。「取り替え子」とは、妖精が人間の赤ん坊をさらい、代わりに残してゆく妖精を意味する。作品の主人公、Saaski は、人間と妖精のハーフという出自をもつために妖精の塚を追われ、記憶を消されて、人間の夫婦の子どもとすり返られる。

人間と妖精の混血である Saaski は、日常と非日常のあわいに立ち、どちらの世界にも完全には属さない。そのため、排他的な村の生活の中で、居場所のない感覚を抱いて生きている。作品中で、妖精としての特性は主人公の異端性の象徴として用いられ、日常にも非日常にも完全には属さない Saaski が、現実の中でどのように生き、どこに存在の根を下ろす場を見つけるのか、という「居場所探し」がテーマになっている。

もっとも、主人公の居場所は最後まで用意されない。自分の出生の記憶を取り戻した Saaski は、村に出稼ぎにきていた少年 Tam と共に、妖精の塚から自分と交換にさらわれた子どもを取り戻し、村を去る。自分の理解者と共に、新たな居場所を求めて去るという結末には、村人たちに受け入れられ、彼らと共に生きるというわかりやすいハッピーエンディングとは異なる質の希望が感じられる。

作者が作品の冒頭に”To all children who have ever felt *different*”という言葉が付していることからわかるように、人間と妖精のハーフの主人公には、居場所感覚の希薄な現代アメリカの子ども(若者)像が反映されている。伝承的モチーフと現代アメリカの子どもや若者を取り巻くさまざまな問題とが結びついた主人公は、他の作品にも登場する。ギリシア神話のモチーフを取り入れた Rick Riordan の *Percy Jackson Series* (2005-) は、ADHD の少年が demigod(人間と神のハーフ)として生きていくことで居場所を獲得していく。また、Ursula K. Le Guin の *Earthsea Series* に登場する虐待を受けた少女、Tehanu は、竜の言葉を解する能力をもち、作品世界の鍵を握る人物として描かれている。

伝承的なモチーフを取り入れ、日常と非日常のあわいに生きる異端の主人公を通して希望の方向を模索するのは、現代アメリカ児童文学のファンタジーのひとつの傾向といえるだろう。*The Moorchild* は、その興味深い一例ではないだろうか。

## 1. フランス第二帝政期における宗教と女子教育

山内由賀（京都大学大学院博士後期課程）

本発表は、フランスにおいて宗教と女子教育の分離点となった女子教育の公教育化に至る前提としての、女子教育と宗教の関係を検討するものである。

19世紀のフランスでは、男子のためには高等教育機関として中世から大学が存在していた。一方で女子に関しては、国家の主導による公的中等教育制度は1880年のカミーユ・セー法（Loi Camille Sée）まで待たなくてはならなかった。それまでの女子教育とは貴族・ブルジョワ階級を対象とした限定的なものであり、しかも彼女たちに対しても修道院または世俗の寄宿学校といった私立の教育機関、あるいは家庭での母親による教育という、わずかな選択肢しか用意されていなかった。これらの中で、修道院寄宿学校は17世紀に端を発するフランスの貴族・ブルジョワ女性のための伝統的な教育形態であり、貴族やブルジョワ階級の女性は初聖体の年齢から修道院寄宿学校に入り、そこでカトリック規範に基づく教育を完成させるのが一般的とされていた。特に、第二帝政期には「カトリックの女性化」と称される全聖職者の4分の3が女性という現象がおこり、修道院寄宿学校は名実ともに女子教育の中心的担い手となる。

しかし、このように公教育化以前に女子教育を担ってきた修道院寄宿学校に焦点をあてた研究はほとんどない。それは第一に、修道院寄宿学校での教育は女子に対する古くからの慣習の継続として捉えられ、19世紀の女子教育と宗教の関係は自明視されてきたからである。先行研究においては、女子教育と宗教の関係が不可分であることが当然として捉えられており、修道院寄宿学校の教育は宗教教育を中心として、あまり水準の高いものではなかったとされている。

そこで本発表では、カトリック教会の支援を背景に修道院寄宿学校が隆盛を迎えた1850年代に焦点をあて、宗教と女子教育の関係の自明性の要因を探ることを試みる。それは、特に1850年代にファルー法（Loi Falloux）とともにカトリック勢力が復権し、修道院寄宿学校が女子教育の主たる担い手となったことこそが、女子教育をめぐる国家とカトリック教会のヘゲモニー闘争へと至るカトリック教会と女子教育の関係性を明確にするものであると考えられるからである。

## 2. Wilde の反復表現に関する一考察—“The Nightingale and the Rose”について—

西美都子（摂南大学非常勤講師）

Oscar Wilde の“*The Nightingale and the Rose*”は、1888 年に出版された童話集 *The Happy Prince and Other Tales* に収録されている。この作品は、ある一人の恋する学生ためにナイチンゲールが、命を懸けて赤いバラを作り出すが、結局、花は道へと投げ捨てられ、荷車に轢かれるというある種、悲劇的な童話である。

手紙の中で、彼は、この作品について、アイデアではなく形式から書き始めたこと、童話の中で最も精妙に作り上げたことを明かしている。また、手紙での告白は、同時期に発表された Wilde の評論、“*The Decay of Lying. An Observation*” (1889) と “*The Critic as Artist. With some Remarks upon the Importance of doing Nothing*” (1890) で展開されている芸術論の内容と一致している。

これらの中には、彼が“my golden book”と呼んでいた Walter Pater の *The Renaissance : Studies in Art and Poetry* の影響がうかがえる。Wilde は Pater の芸術論を一部踏襲しながらも、彼自身の芸術論を展開している。

Pater は、この本の中で、芸術における音楽の優位性を挙げている。その根拠として挙げた形式と内容の区別がつかない状態で存在する神秘的な作品を最高の芸術とする点は、Wilde も同じである。しかし、彼は、芸術作品としての最上のもは音楽ではなく、文学であると表明する。そして、想像力を芸術作品の絶対必要条件として位置づける。

彼は、言葉のもつ音楽性を指摘し、文学も音楽と同様に、本来は聴覚に訴えかけるものであると言う。言葉のリズムで作品を音楽の状態に近づけ、音楽のように一義的に解釈ができないことを彼は、目指しているように思われる。

他方、内容面では、Wilde は、何も意味を表さない音楽よりも、言葉によって作品世界を作り上げることを選んだ。というのも、彼は、人間の最も卓越した豊かな表現媒体は、言葉であり、思想、情熱や精神までもが言葉だけのものであると考えていたからだ。彼は、言葉の多義性を巧みに利用して読者の想像力を膨らませるように工夫し、作品が抽象的になるように試みている。

特に、形式と内容を区分できないようにするための技法として、この作品では、繰り返しが効果的に用いられている。本発表では、主に作品内における反復について取り扱い、いかに形式と内容が渾然一体となるように Wilde が試みているのかを考察したい。

## 3. 『白い悪魔』の disorder 表象とカタルシス：復讐劇によるパブリック圏生成の条件

中村友紀（関東学院大学准教授）

近代初期イングランドの社会史・文化史において、disorder（秩序の混乱、騒乱、あるいは公序良俗の乱れ）とは歴史家のよく使う一つのキーワードである。当該社会の人々は order への明確な意識を持っていた。統治する側、力を持つ側の人々も、民衆の側も、それぞれの立場から見た秩序についての明確な概念を持ち、その意識の強さから逆に、規から逸れた反秩序についての声も史料に多く残されている。暴動や魔女騒ぎは当局にとっての反秩序であり、不正や無体な法律は、古き良き治世を忘れない保守的な民衆にとって反秩序であった。人々はなにかを有害だと批判したい場合、典型的に、それを order から外れた墮落したものとして断罪した。多くの場合、その有害なものとは、法律や習慣の変化にかかわるもの、つまり一概に言うと、近代化による軋轢に起因するものが多かった。

John Webster の *The White Devil* (c. 1612 年、以下『白い悪魔』) には、1612 年当時のイングランド人にとっての反秩序的な事象が数々登場する。モラル荒廃やジェンダー逸脱に加え、当時のイングランド人には脅威であったカトリック圏のマキャヴェリ的駆け引きの権謀術数が描き出される。そして、劇の結末でこれらの混乱は、復讐の完遂という大団円のうちに収束する。復讐劇では大抵の場合、復讐の完遂によりカタルシスがもたらされるが、それは悪事が制裁を受けるのを見ることから生じる。つまり秩序破壊の混乱を経て秩序が回復される過程の疑似体験を得ることが、復讐劇のもたらす大きな効果である。

こうした体験を復讐劇に集う観客が求めたことに対して、どのような心性分析ができるであろうか。本論では、暴動の歴史的現象にみる心性と、復讐劇の表象との関連性に注目する。得てして近代初期の民衆暴動の研究ではイングランドとフランスの現象が比較されることが多いが、フランスの事件のほうがより頻繁で熾烈であり、一方、イングランドのほうが傾向の変遷が早く現れることが多い。本論では、民衆の反秩序と革命の関連性の分析のよりどころとして、Roger Chartier によるフランス革命の文化的起源の研究を取り上げる。イングランドの暴動に関する研究では、社会的要因は多く検証されてきたが、シャルチエの研究のような、啓蒙思想や印刷と読書といった文化的要因が、革命あるいは暴動という行動に及ぼした影響への検証については、余地が多く残されている。シャルチエの議論を参照しつつ、抗議の表明としての 2 種の行為、つまり暴動という集団行為と、復讐劇という表象行為とに表れた disorder 概念を分析する。

また、暴動、復讐劇、どちらも、抗議あるいは制裁の対象への批判を共有する契機をもたらす集団経験となる。その集団は半ば「公衆」であり、半ば「民衆」であり、厳密にいうと、ハーバマスの意味でのブルジョワ公共圏のパブリックではない。しかしながら、パブリックとは 18 世紀に突如出現したわけではなく、その初期段階として、17 世紀の抗議行動の周囲に関連する人々の集まりを考察する。



#### 4. ハードウィック・D. ローンズリィ牧師に関する一考察—ケジック工芸学校について— 中村茂徳（西南女学院大学非常勤講師）

ナショナル・トラスト共同創始者の一人であるハードウィック・ドラモンド・ローンズリィ牧師は、1878年彼は湖水地方へ転勤後、聖職活動と共に、地域貢献となる諸活動にも熱心であった。彼は住民の生活改善や自然保護、そして教育などに積極的に関わり指導の立場にいた。今発表では、ローンズリィ牧師による住民の生活改善の一つとなったアート・クラフト運動について報告したい。

初めに、湖水地方のケジックでのローンズリィ牧師の活動について述べる。彼はウィンダムアのレイ教区からケジックのクロスウェイト教区へ移る。レイ教区での諸経験が新天地でも活かされることになる。彼の実績の一つに地域住民の生活改善指導がある。その生活改善指導は、住民の健康面や仕事などにおいて顕著であった。彼は地域住民、とりわけ失業者や未就業者への支援に勤しむことになる。その指導は木工や金属の細工技術を習得させることであった。活動当初は、クロスウェイト教会の部屋が教室として利用されて、参加者も少なかった。

次に、ローンズリィ牧師が妻エディス共に開校したケジック工芸スクールについて述べる。この学校は、1884年11月にケジックにハードウィックと彼の妻エディスによって創設された。それは前述した教会の工芸教室が発展したものであった。やがて、この学校は生徒数も年毎に増加し、すばらしい成果を生み出し、以後100年間続くことになる。そのような実績に貢献した生徒たちの作品についての検証したい。当時イギリス国内で流行していたアート・クラフト運動の作品群と比較しながらその出来栄を検討する。

## 5. 「菓子」をめぐる日英対応表現比較

山内啓子（神戸松蔭女子学院大学准教授）

食文化は料理文化論を始めとしてすでに多くの研究がなされているが、本研究の主たる目的は料理文化論や食そのものからは視点をずらし、その研究対象を言語表現に求め、その成果を英語教育・異文化理解教育に活かすことである。更にはその有効性や知見を、社会的実践活動及び教育実践につなげてゆきたいと願うものである。

さて、最近の日本ではハロウィンの‘trick or treat?’は「お菓子をくれなきゃいたずらすぞ（よ）」との表現で、秋の風物詩の一つとして定着した感があり、小学校の外国語活動でも人気のある行事の一つになっている。これは英語では語感とリズムが活きる表現であるが、果たして *treat* は「菓子」で正解なのだろうか？むしろ直訳的には「いいものくれなきゃいたずらすよ」の方が *treat* の辞書的語義を正確に表し、また多少なりとも頭韻を踏むことでリズム感も活かせる。一方、英語で「菓子」はどのように表現すれば最も適した日本語になるのだろうか？包括的に表そうとすると *sweets*, *goodies*, *confectionery*, *confection*, *sweetmeat* などを挙げるができるが、実は菓子の中には細密に分類された語彙が多く存在する。在日英国人が日本の煎餅を *biscuit* と表現していることに驚いたこともあるが、煎餅の製造過程と *biscuit* のラテン語由来の「二度焼き」の意を勘案すると誤っているわけではない。

日本の菓子は元来「木菓子<sup>きがし</sup>」と呼ばれ、木の実から始まったものである。そこへ唐からの神饌などが加わり菓子の変遷は進んでゆく。他方、*sweets* は‘word which English children recognise as a collective term for diverse items of sugar *confectionery*. Sometimes reduced to the diminutive ‘sweeties’, it is roughly equivalent to the French term *bonbons* and N.American *candy*. (*Oxford Companion to Food*) に始まり、子どもと砂糖との関連が強く示されている。

そこで、今回の発表では英語の児童文学に的を絞り、それらのなかに出現する菓子類を調査し、その日本語訳語表現、また日本の菓子との比較考察を行う。果たして児童文学の中に突出する「菓子」があるのだろうか、またその社会・文化背景とはどのようなものであるだろうか。

大学生が教職を目指したり、小学校での外国語活動で指導補助を行ったりする際の学生自身の英語の学びの意欲を高める取り組み口として、また身近な存在でありながら語学としての学びと異文化理解の入り口にもなり得る「菓子」の深い世界の一部を紹介する。

## 6. 自文化発信のための国際交流と海外サービスラーニング

### ～グローバル人材の育成を目指した外国語教育の実践～

山崎祐一（長崎県立大学教授）

現在、本学学生が外国語（英語）学習の分野で地域貢献に関わる中で、異文化について学ぶと同時に、自文化について再認識し、それを発信していくことの大切さを学んでいる。大学生たちが体験学習を通して学び、そこで得られた知見を自分の英語学習の分野にフィードバックし、大学でさらに学び、再度それを地域に還元するという円循環式のサービスラーニングを展開している。学生たちは「地域に開かれた大学」の成員として、地域の小中学校、及びアメリカンスクール外国語教育と異文化理解の分野で、地域貢献活動に8年間継続して取り組んでいる。この活動の意義は、大学が地域と協働、連携することで、学生が大学で習得した英語に関する知識と技術を地域に還元、発信すること、また、その体験を通して、自分の英語学習の意識改革や動機付けに結び付けていくことである。

昨年度、本学と米海軍佐世保基地内大学との交流協定が実現したことを受け、今年度は、その大学の一つであるメリーランド大学にその活動の場を広げた。米海軍基地と共存を図っている佐世保市にとって、本学学生が教育の分野で市内にあるアメリカの大学と連携していくことは、本学が地域に開かれるということのみならず、両国の友好と親善や国際交流にも一翼を担うことができる。また学生が継続的に取り組んでいる地域貢献活動を、「学外」から「海外」へと展開した。地域をより広い意味で捉え、「海外」という地域において、外国語学習や異文化理解、そして自文化発信に関する「海外サービスラーニング」の活動をアメリカ合衆国ハワイ州の大学の日本語教育分野と同州の小中学校外国語活動で実施した。この取組のコンセプトは、1) アメリカにおいて異文化理解と地域貢献を外国語教育にどのように結び付けて実践しているのかについて調査、観察活動を行うと同時に、大学生が佐世保市の地域貢献で培った発信力をもって、海外の外国語教育と異文化理解教育に貢献すること、2) 大学生が、グローバルなコミュニケーションのスキルとマインドを身に付け、日本や長崎県、佐世保市の文化、歴史について世界に発信する力の基盤を作ること、3) またそうすることによって、ハワイの日本語学習者たちが異文化である日本についてさらに興味、関心を抱き、彼らの日本語学習の動機付けに役立てること、4) そして、活動を通して大学生の英語学習や国際交流に関する意識の向上につながることであった。

本発表では、上記の相互交流として、同様のコンセプトを持って今年度新たに佐世保で展開したハワイの大学生の海外サービスラーニングについて報告する。単なる受身的な海外語学研修とは全く異なり、自らが自文化について、フィールドで積極的に発信することによって、海外の外国語教育や異文化理解教育に貢献をし、さらにそれを学生本人の外国語学習の場に持ち帰り、それについてより深く学び、学習意欲の向上にも役立てるというものである。海外サービスラーニングを通して、ハワイの大学生たちが長崎や佐世保で体験学習した内容や成果、課題について説明する。

## 1. 日本語の「XはYがZ」構文とインドネシア語との対応関係について

ティウク・イヒティアリ (京都大学大学院博士後期課程)

三上は「象は鼻が長い」の構文においては、「は」の兼務の問題が扱われている。つまり、「象は」は「象の」を兼務している。インドネシア語の場合は、「象は鼻が長い」構文は、次のように-nyaによる主題化(文(2))と対応するであろう。

(1) <u>Belalai</u>	<u>gajah</u>	<u>panjang.</u>	→	(2) [Gajah [belalainyapanjang.]]
主語	述語			主題
Nose (for elephant)	elephant	long		Elephant nose-his long
'Elephant's nose is long.'				'Elephant, his nose is long.'

この“-nya”の機能は、主題・コメントの文を標示するためであるとする。元の文(1)の構造では、所有者“gajah”は、主語である名詞句を修飾されるが、その所有者“gajah”が主題になり、文頭に立つと、元の文の主語は“-nya”で標示され後続する。

しかし、「カキは広島が美味しい」という文は、「象は鼻が長い」構文とは違う文と見なされてきた。その「カキは」も「カキの」の兼務ではない「?カキの広島が美味しい(こと)」。 「広島が美味しい」は、主題についての属性を述べる文ではない。インドネシア語の場合も、-nyaによる主題化の文を対応しない[\*TiramHiroshimanyaenak.]。「カキは広島が美味しい」構文は、インドネシア語の場合、次の文が対応すると考えられる。

(2) Tiram, **Hiroshima(lah)** yang enak.

Oyster Hiroshima that delicious  
'As for oyster, it is Hiroshima the delicious one.'

上のインドネシア語の文では、-lah 助詞によって、Hiroshima が焦点化されている。-lah 助詞は'predicative marker'や'foregrounding marker'としての機能を持つ。一般に述語を標示し、特に述語が主語の前に置かれる時に使われている。-lah は任意の助詞である。

本研究では、この日本語の「象は鼻が長い」構文と「カキは広島が美味しい」構文と、インドネシア語の-nyaによる主題と、Wh-疑問の変項(答え)の predicative 化とを対応関係を考察したい。

## 2. 英語句動詞 **take in** の比喩表現としての意味

岡良和 (人間環境大学教授)

以下 (1a-b) において、

- (1) a The salesman finds it easy to takein old ladies and persuade them to give him their money.

(セールスマンは年取った女性たちをたぶらかして金を巻きあげるのはたやすいと思っている.)

- b Were you really takenin by an old trick like that?

(君は本当にそんなよくある手口でだまされたのですか.)

— 『研究社・ロングマン句動詞英和辞典』 (s. v. take in<sup>1</sup> 12) (下線筆者)

「動作主が対象者を三次元空間内部に『摺み入れる』」概念がそれぞれ能動態と受動態で表示されているが、「内部」概念表示語 **in** に後置されると想定されるのは「騙された結果生じる悪い状態」であると考えられる。

また、以下 (2) で示された「うそを信じ込む」事と上記 (1a-b) における「騙す」事は同じ事象であると考えられるが、それぞれの概念は異なっていると思われる。

- (2) The poor man takesin all the lies she tells him.

(男はかわいそうに、彼女のうそをすべて信じてしまう。)

— 『研究社・ロングマン句動詞英和辞典』 (s. v. take in<sup>1</sup> 11) (下線筆者)

上記 (2) は騙される人が自分の頭の中にうそを「摺み入れる」のであるが、上記 (1a-b) では騙す人が騙す相手を悪い状態に「摺み入れる」のである。

さらに、「騙す」の意味では文献上は受動態での表現が能動態の表現より先に現れている。これは **take in** が「騙す」意味で用いられる場合には「騙す」動作主よりも「騙す」行為を受ける対象者がより重要と考えられていることによると思われる。

### 参考文献

Azuma, N. et al. (trans. eds.) (東信行他訳(編)) (1994) 『研究社・ロングマン句動詞英和辞典』 東京: 研究社.

## 3. 頻度副詞に関する一考察—程度副詞との関連をめぐって—

江雯薰 (台湾・淡江大学准教授)

現代日本語において、事態の捉え方から頻度副詞と程度副詞をみると、頻度副詞は事態の外側から事態の実現の仕方を限定するものであるが、程度副詞は事態の内側から事態の実現の仕方を限定するものである。たとえば、「よく」の例をみると、次の(1)は頻度副詞として、(2)は程度副詞として用いられるものである。

(1) ママはよく日本食をつくる。そうして僕は、日本食が好きだ。(日々)

(2) 東京の下町にある遠藤パン店は、おいしいパンを売るのはほんじょうしていた。とくに、遠藤パン店のアンパンはよく売れた。(ブン)

(1)の「よく」は「日本食をつくる」という事態の外側にあり、その頻度の高さを表す。それに対して、(2)の「よく」は「アンパンは売れた」という事態の内側にあり、その事態の程度の高さを表す。また、頻度副詞と程度副詞は同じ文における位置をみると、次のようなことが見られる。

(3) 夏になると、お水をよくたくさん飲む。(作例)

(4) 彼は非常によく一人旅をする。(作例)

(3)では、「よく」は「たくさん飲む」ことを修飾し、(4)では「非常に」は「よく一人旅をする」ことを修飾する。前者は頻度副詞の「よく」が程度副詞の「たくさん」の外側にある例であるが、後者は程度副詞の「非常に」が頻度副詞の「よく」の外側にある例である。このことから、それぞれの文中における位置をみると、頻度副詞は程度副詞の外側にある場合もあれば、内側にある場合もあると言える。また、(5)のように程度副詞が頻度副詞用を修飾できない場合がある。

(5) \*彼は非常にたびたび一人で映画を見に行く。(作例)

(5)では、「非常に」という程度副詞は「たびたび」のような頻度副詞を修飾すると、非文となる。

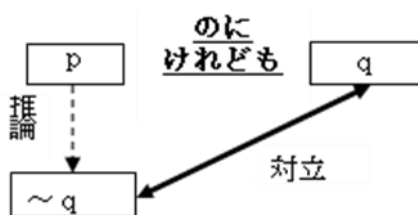
(3)～(5)をみると、頻度副詞と程度副詞との修飾関係はどのようなものか、そしてそれぞれにはどのような制限があるのかを考察する必要があると思われる。

本発表では、頻度副詞と程度副詞が共起できない場合の制約を考察し、そして共起できる場合は、述語の特徴、話し手の事態に対する捉え方などの観点から、頻度副詞と程度副詞との関連性を分析し、頻度副詞の体系をより明確にすることを目的とする。

## 4. 複文の推論関係について—接続助詞「けれども」と「のに」の比較を通して—

王天保 (台湾首府大学非常勤アシスタント教授)

本研究は複文における推論関係に着目し、接続助詞「けれども」および「のに」を論じるものである。物事間の関係は因果関係であれ、逆接関係であれ、いずれも論理関係の一種であると思われている。そのために接続助詞に関する研究では、接続表現が表す論理関係はどのようなものか、どのような違いがあるのかを論じることは接続詞の使い分けに有効で、必須だと考えられてきた。論理関係を用いて日本語の逆接表現を論じたのが、坂原(1985)、渡部(1995)、家田(2004)、前田(2009)の記述である。これらに対し、井島(1993, 1996a, 1996b, 1999, 2003)は、条件文(順接、逆接)は極めて認知的なものであるので、論理関係より「期待」という概念の記述が適切であると主張する。本研究は井島(1993, 1996a, 1996b, 1999, 2003)を支持し、井島の「期待」を「推論関係」とし、逆接接続助詞「けれども」および「のに」の使い分けを説明する。



本研究の主張は以下のようなものである。日本語の「けれども」「pだから~q」という話者が考えた成立可能な推論が後件と対立することを表す。日本語の「のに」は「pだから~q」という話者にとって必然的に成立する推論が後件と対立することを意味する。「のに」が用いられる場合、我々の認知にある「pだからq」という推論は必然的なものであるため、その必然的なものと後件が対立すると、意外、不満などの気持ちが生じやすいと言えよう。

これに対して、「けれども」に関する認知には成立可能な推論だけではなく、推論が成立しない可能性も排除されていない。そのため、成立可能な推論が後件と対立しても、われわれにとってその対立に対する心構えはもう出来ているので、意外の気持ちは生じないと考えられる。さらに推論成立の可能性を序列関係として捉えることで、「けれども」の逆接用法から非逆接用法へと変化する、意味の連続性を示すこともできる。つまり推論成立の可能性が減っていくにつれ、「けれども」は逆接の用法から、「対比」「並列」「前置き」などの用法へ拡張していくと考えられる。

キーワード：接続表現 けれども のに 推論関係 可能性

## 5. 2つの映画を使用したプレゼンテーション能力および英語力伸長の試み

森永弘司（同志社大学嘱託講師）

北島美咲（同志社女子大学嘱託講師）

はじめに：映画は学生に人気のある教材であり、その活用方法も様々である。一般的にはリスニング力強化のために使用されることが多いが、スクリプトを使用して読解力を強化するために使用される場合も多い。発表者は以前に映画を利用した英詩入門の授業を実施し、かなりの成功をおさめることができた。今回の発表では、映画が学生のプレゼンテーション能力および英語力の伸長にどの程度の効果があるのか検証しようとして試みた実践の報告を行いたいと思う。研究の目的：前期に映画 *Dead Poets Society* を使用しておこなったプレゼンと、後期に映画 *Good Will Hunting* を使用しておこなったプレゼンの比較を問う質問紙調査を通して、2つの映画を使用したこのクラスがプレゼン能力の向上に関してどの程度効果的であったかの検証をおこなう。さらに後期の授業で *Vocabulary Levels Test* を使用しておこなった語彙力の増減の調査、および *C-test* を使用しておこなった英語総合力の増減に関する調査を通して今回の授業が学生の語彙力および総合的な英語力を伸ばすうえで効果があったかの検証を試みた。授業方法：前期の授業の前半で *Speaking of Speech* というプレゼンテーションの基本を解説したテキストを使用し、学生達にプレゼンテーションの基礎を身に付けさせるよう指導した。その後で課題を与えて映画 *Dead Poets Society* を視聴させ、二人一組で課題にもとづくプレゼンテーションをおこなわせた。プレゼンテーションを聞いていた学生のペアと担当者がそれぞれ10点満点の評価をおこなった。後期の授業では *Good Will Hunting* のスクリプトが収録されているテキストを使用して授業をおこなった。このテキストは12の章で構成されており、各章には単語力および熟語力強化のための問題、リスニングによる内容に関する正誤問題等が収録されている。各章が終わるごとにその章に掲載されているスクリプトの部分のDVDを視聴させた。テキスト終了後は前期同様ペアを組ませプレゼンテーションをおこなわせた。今回はこの英語をまだ見ていない人にこの映画を是非見たいと思わせるパブリシティを意図したプレゼンテーションをおこなうよう指導した。研究の手続き：プレゼンテーション能力の伸びに関しては後期のアンケート紙調査の際に、前期と後期のプレゼンテーションを比較させ上手くいった方を記述させた。語彙力と英語総合力の増減に関しては、第1回目と最終授業時に実施した上記のテストの得点の算出によって検証をおこなった。データの結果：上記のアンケート調査およびテスト結果の詳細に関しては発表時に報告する。



## 6. 防災弱者である外国人のための異文化と知識の共有に関する研究

奥村訓代（高知大学教授）

高知県を中心にここ 30 年以内に必ず南海大震災があると言われている。ここでは、平成 24 年度後期（2012 年 10 月から「日本語教授法演習」および「日本事情」の授業）として行った外国人留学生への防災知識の周知徹底、並びに異文化適応共有から見えてきた諸々の課題についてまとめるものである。

県や市町村の防災課を中心に防災意識の啓発とともに訓練や情報が充実していく一方、防災弱者であるといわれている外国人に対する防災意識や理解は思いのほか進んでいないことが、今回、文化庁の委託事業（外国人のためのハザードマップ、日本語テキスト作成）を通して見えてきた。

今回発表する趣旨とテーマ設定は、次のとおりである。

- 1 ここ 30 年以内に必ず南海大地震は、発生するといわれている。また、その規模は、東北大震災以上であるとも言われている。そこで特に防災弱者である外国人への対応不足について日本人の認識を喚起するとともに避難所等の共同生活の、より健全な姿を模索する。
- 2 高知県の特異性（東北との類似点）と問題の所在
  - 1) 県の半分は、海に面している。
  - 2) 700 キロ以上に及ぶ海岸線がある。
  - 3) 外国人が、日本でも一番少ないのに点在しており、情報の集約・一元化並びに交流も難しい。
  - 4) 最大 34 メートルの津波予想が出されている地域を含んでいる。
  - 5) 民間の日本語教育機関はなく、ボランティアサークル等も活動力が非常に薄い。

その結果

- 3 以下のような現状が生じている
  - 1) 対象となる外国人数が少ないので、公私ともにバックアップ体制が不十分である。
  - 2) 異文化理解、多文化共生教育が双方にとって十分ではない。
  - 3) 経験の共有などが配慮されていない。
- 4 改善への方策を模索・提案する

## 1. 内なる「異境」の発見—19世紀デンマーク文学・芸術におけるユラン半島ヒース文化の美的表象 奥山裕介（大阪大学大学院博士後期課程/日本学術振興会特別研究員）

エリサベト・オクスフェルトの『ノルディック・オリエンタリズム』*Nordic Orientalism* (2005) は、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』によって理論づけられたヨーロッパ的「自己-他者」関係を参照しつつ、周縁ヨーロッパ世界の独特な自己理解モデルを提示した。ヨーロッパとオリエントの2極間の対立に着目するサイードに対し、オクスフェルトの問題関心は、「中心ヨーロッパ世界」・「周縁ヨーロッパ世界」・「非ヨーロッパ世界」の3極関係に依拠した文化的アイデンティティの形成に置かれている。その所説によると、19世紀の北欧文化圏は、文学・芸術・都市空間メディアを介したスカンディナヴィア世界とオリエント世界のイメージ上の融合によって、ヨーロッパ的「普遍性」と非ヨーロッパ的「特殊性」の両面を表象する中間的な地域像を体現したと結論づけられる。本研究発表は、オクスフェルトによる北欧地域アイデンティティの理論的考察をローカル・アイデンティティの水準に応用し、デンマークに内在する「中心-周縁」・「自己-他者」の対立関係から、間文化的言説の交錯による多声的文化圏としての地域理解を提示する。

考察の具体的な対象は、デンマークの国土でゆいいつ大陸ヨーロッパ世界と地続きであるユラン半島 (Jylland) のランドスケープ表象に求められる。ケネト・オルヴィの『自然の観念的風景』*Nature's Ideological Landscape* (1984) [デンマーク語訳・増補版『ヒースの自然—各時代の自然観と自然利用』*Hedens natur—Naturesyn og naturanvendelse gennem tiderne* (1986)] によると、ユランの荒涼としたヒースは、19世紀の中頃まで美的表象の対象にはならなかった。それどころか、これら耕作不可能な無人地帯 (no man's land) は、皮革業者や死刑執行人といった賤業従事者、「馬铃薯ドイツ人 (Kartoffeltyskere)」やユグノーのような外来入植者、ロマや匪賊といったアウトサイダーの存在によって、他者イメージの濃厚な周縁領域を形成していた。ところが、スカンディナヴィア文化圏とドイツ文化圏の間でシュレースヴィヒ=ホルシュタイン両公爵領の帰属をめぐる係争問題が過熱するとともに、国境域に位置するユラン半島ヒース地帯の景観を、民族ロマン主義的な価値基準から積極的に評価する動きが現れる。1864年の第2次シュレースヴィヒ戦争の敗北によって両公爵領がデンマークの支配領域から独立した後、「外に失ったものは、内にて取り返されん」の標語の下、ユランの荒野地帯のクリアランスと開墾作業が推進されると同時に、地方独特の景観を保護しようとするヒース保護の気運が高まる。産業化の達成によって国民経済の繁栄と文化的水準の向上を目指す都市の教養層とユラン独自のアイデンティティの確立を主張する地方の対立は、モダニズム期の文学や芸術にも反映され、デンマークおよび北欧における文化的多声性・複相性のメルクマールとして人口に膾炙することとなる。

本発表では、ユランが美的評価の対象外に置かれていた19世紀初頭以前と、シュレースヴィヒ=ホルシュタインの帰属問題が浮上した1840-60年代、デンマークの産業化が達成された1870-90年代の3期に分けて、各時代のヒース地帯に対する芸術表象と同時代言説を検討する。以上の考察結果を総合して、近代デンマークにおける「自己」表象が、国土に対する美的評価の変遷の中で生じた所産であることを明らかにし、文化的多元性・重層性を前提とした北欧地域に独特なアイデンティティ問題の文脈理解を導き出す。

## 2. 現代消費社会における伝統文化の新たな発展

### — 婚礼イベント企画開発プロジェクトを通して —

関口英里（同志社女子大学准教授）

発表者担当の2年次ゼミでは、消費社会における地域特有の伝統文化や産業をめぐる現状を捉え、更なる発展に寄与することを目標に、京都のブライダルサービス企業と連携した独自の婚礼イベント・プロデュース活動を5年にわたり継続している。本発表においては、「古くて新しい」京都文化の創出を目指した産学連携プロジェクトが持つ社会的意義と、教育・研究や産業への様々な効果について、昨年度の実践事例を中心に報告と考察を行う。商品サービスの企画開発からマーケティング、販売や広報に関わるリアルな活動を通してビジネスを実習することで、学生のコミュニケーション力、社会貢献やキャリア意識の向上が可能となる。そして本企画は、比較文化的な「京都らしさ」やブランド性の再考、現代社会における伝統の継承と新たな方向性の模索、ひいては日本の消費文化特性について実践的な研究を可能にした点で大きな意味を持つものと考えている。

開発する婚礼プランのテーマや構成は毎年更新され、フィーチャーする伝統産業分野や関連アイテムも企画ごとに異なるが、2012年度においては、京都独自の「香」に焦点を当てた儀礼と商品の提案を行った。企画開発にあたり、京都の伝統的な香文化を担う老舗企業の参加協力を得て、「香りで結ぶ縁」「香りが繋ぐ伝統文化」を主題とするイベント「結香式」を考案した。オリジナル性が重視される近年の婚礼において、「香」を軸に、従来にはない婚礼儀式を考案し、本質的な意味での独自性を創出したことは特筆すべきである。また、「香」を婚礼と結び付け、更にそれを新たな人間関係の結び付きへとメタフォリカルに発展させながら、香りの演出を行った点にも本企画の新規性があったといえる。そして、異なる立場から京都文化の発展寄与に関わる産学三者のコラボレーションにより重層的なベネフィットが生成された点にこそ、本企画ならではの意義が見出せる。

理論と実践を両立させる研究指導を行うとともに、学生の自主的な思索活動と文化社会的貢献を促す本企画は、従来型の受動的座学スタイルとは一線を画す教育的位置づけを持つものである。また文化研究の見地からも、学生達が地域文化、日本文化の本質や独自性について考え、伝統の意味を改めて問い直す効果的な学びの機会となった。本企画を通して、一見固定的に認識されがちな伝統のフレキシビリティやクリエイティビティに学生自らが気づき、現代日本で機能する文化の仕掛けや消費社会的メカニズムの一端を実体験から学究できたことは意義深い。今後も企画内容や構成、授業や組織運営のより発展的なあり方を模索しながらプロジェクトを継続し、これまでに得た成果の蓄積を新たな学びに繋げてゆくことが重要であろう。伝統文化や産業に関わる企業や人々との連携を推進しつつ文化の本質を社会実践から学び、現代日本の消費社会における「文化装置」を戦略的に創造する取り組みを行うとともに、その成果を様々な角度から検証してゆきたいと考える。

### 3. 長崎海軍伝習所が日本の近代化に果たした役割

小笠原真司（長崎大学教授）

本研究のきっかけは、2009年2月の英語テキスト『幕末・近代化の先覚者たち』（*Pioneers of Western-Style Medical Education and Modern Technology in Japan*）（英光社）の出版です。これは、オランダの幕末研究者たちの書いた英文論文を基に、上級英語学習者用に学習テキスト化したものです。オランダの研究者の関心は、幕末の長崎にありました。

嘉永6年（1853年）ペリーの黒船の来航以来、国内が混乱する中、幕府は日本を守るために必要な西洋式海軍教育の場として、長崎海軍伝習所を開きます。長崎海軍伝習所は、安政2年（1855年）から安政6年（1859年）の4年間、オランダ人教官の指導のもと開かれました。そこでは、海軍教育、操船術のみならず、化学、物理、数学のような学問から近代工業、医学教育まで行われていました。また、語学教育も重視されていました。日本の近代化は、この長崎海軍伝習所から始まったとすることができるのです。

しかしながら、歴史教科書等において長崎海軍伝習所の存在は、それほど重視されていません。当然そこで教育活動をしたオランダ人の名前を知る人もほとんどいません。本発表では、あまり知られていない長崎海軍伝習所の実像を、参考文献やオランダ人幕末研究者の論文を基に迫って見たいと思います。特に、医学教育、近代工業教育や語学教育など、日本の近代化に大きな貢献をした部分に光をあててみます。

また、長崎海軍伝習所の伝習生は、幕府側の若者だけではなく、全国の多くの藩の若者もたくさん参加しており、そこには出身による区別もありませんでした。当時としては驚くような教育環境にあった長崎海軍伝習所出身の若者たちは、その後幕末、明治へと日本を動かしていきます。彼らのその後の活躍にも触れながら、長崎海軍伝習所が彼らの人生にどのような影響を与えたのかという部分も考察してみたいと思います。

#### 4. 日中対照研究に基づく感情表現の人称制限と表現形式について

鄒賢(同志社大学大学院文化情報学研究科博士前期課程修了)

本論文は、まず、語彙面から日中両語の書き言葉における感情表現に対し、対照分析を行い、その後、日中両語の感情表現の形式を検討することで、表現形式上の異同を考察する。感情は、社会や文化的要素に影響されず、ある程度、人間の間で共通している。よって、感情は、こうした普遍的側面を言語化する際に反映されると予測できる。一方、各言語は異なる性質と構造を有するため、独自の感情表現体系を通して感情を捉える。そういった観点から、両語の共通点及び相違点を明らかにし、日中両語の感情表現の制限について考察する。

日本語には、感情形容詞と感情動詞を述語とする際、人称制限がある。それに対して、中国語においても類似の語群が存在するため、それを述語とする際、同様に、人称制限が存在するかどうかについて対照分析を行う。日中両語の感情形容詞と感情動詞は、「人称制限がある」や「人称制限がない」の2つの場合と仮定し、各自制限がある条件を図表化する。さらに、対照分析を通じて、人称制限を有する理由を検討する。

本稿における感情表現は、人間の心の動きを表す表現を指している。日本語の感情形容詞文は、話し手の感情を直接的、主観的に表す表現形式で、話し手以外の感情を表せないため、人称制限が中国語より厳しい。日本語の感情形容詞文は、現在形の場合、特定の場を除き、主語が1人称に限定される。中国語の場合、これまでの先行研究と異なる点が指摘される。中国語の感情表現は、常に動詞で表されるが、形容詞によって感情が表出される場合もある。ただし、形容詞と共起する動詞が必須である。

日中両語における感情動詞による感情表現について、これまでの先行研究では言及されていなかった中国語にも人称制限があることが指摘される。その制限は、日本語ほど厳しくないが、確かに存在している。日中両語の感情表現ともに、形容詞による表現と動詞による表現が多い。そのほかに、使役文もよく使われる。感情の動きの誘因による感情動詞文の対応に応じて、中国語では、感情の誘因が必須であるという制限がある。

相対的視点から相互関係を見ると、中国語の感情表現は日本語より豊かである。しかし、日本語の感情表現の形式が明確であるのに対し、中国語の形式はやや複雑である。そのため、日本語の感情表現を中国語に対応させる場合、対応形式が多数存在する。また、日本語での感情形容詞文に対応する中国語の表現形式では、動詞文、使役文、介詞が用いられ、感情表現には、中国語の感情動詞文と使役文が対応する。中国語の感情表現には、日本語の感情形容詞文及び感情動詞文が対応する。

本稿は、日本語と中国語が感情を表す際の語彙的・統語的特徴について考察し、両語の対応上の異同に関する考察を試みるものである。

## 5. 川端康成の「雪国」と Seidensticker 英訳の比較—呼称について—

林裕二 (西南女学院大学教授)

川端康成の「雪国」(1935~1947)と E. G. Seidensticker による英語訳 (*Snow Country* 1956)を言語資料として、呼称について考察する。本論での呼称とは次の二つに関わる領域である。1. 会話において、誰が誰を何と呼ぶか、あるいは呼ばないか。2. 語り手が誰を何と呼ぶか、あるいは呼ばないかである。

この小説の主な登場人物としては、主人公の島岡と雪国の芸者駒子、葉子の三者である。他には冒頭に登場する駅長、駒子の許婚とされる行男と、葉子の弟佐一郎が絡むぐらいである。

日本語では、主語と目的語は示さなくても理解される限りは示さない。英語と対照させると、日本語では、主語と目的語を多くの場合「省略」することになるが、日本語では単に「示さない」だけである。主語・目的語関係は文脈上明示しなくても理解できる限りは示さない、文脈依存度の高い (high-context) 言語＝日本語から、文脈依存度の低い (low-context) の言語＝英語にテキストが移されると、原語テキストに明示されていない要素を必要に応じて訳出していくことになる。ここに呼称の問題が関わることになる。

自らを何と呼ぶか (自称詞) と、聞き手を何と呼ぶか (対称詞) が、日本語と英語では、体系が異なる。聞き手を何と呼ぶかは、呼び掛け語に関する分野であるが、日本語では、鈴木孝夫 (1973) が、原則として上下関係が親族内では呼称を規定するとしている。この親族内の規定が、社会的関係にも拡張可能であるとしている。この規定となる上下関係が、「雪国」で基本的には見受けられる。しかしながら、鈴木モデルは、40歳の小学校教員で示している。この規定が、戦前の山間部の温泉町を舞台とする「雪国」には当てはまらない面もあることを考察する。

6. 3・11 原発文学作品を教材とした授業試論—台湾の大学4年生が見た異文化の観点—  
曾秋桂（台湾・淡江大学教授/台湾日本語文学会理事長）

2011年3月11日（金）14時46分に東北地方に大地震が起き、未曾有の「三位一体の受難」（地震/津波/原発事故）に見舞われた現象を日本政府は正式に「東日本大震災」と命名したが、現在では「3・11」と通称されている。また、福島第一原発事故調査報告の公開に従って「原発」の「安全神話」が見事に崩れ、「原発」は日本が直面せねばならぬ一大事となった。「原発」が与えた深刻な影響に注目し、各分野から様々な議論が出され真剣に今後が模索されている中、「原発」を主題に取り上げて創作した文学作品もしばしば見られる。

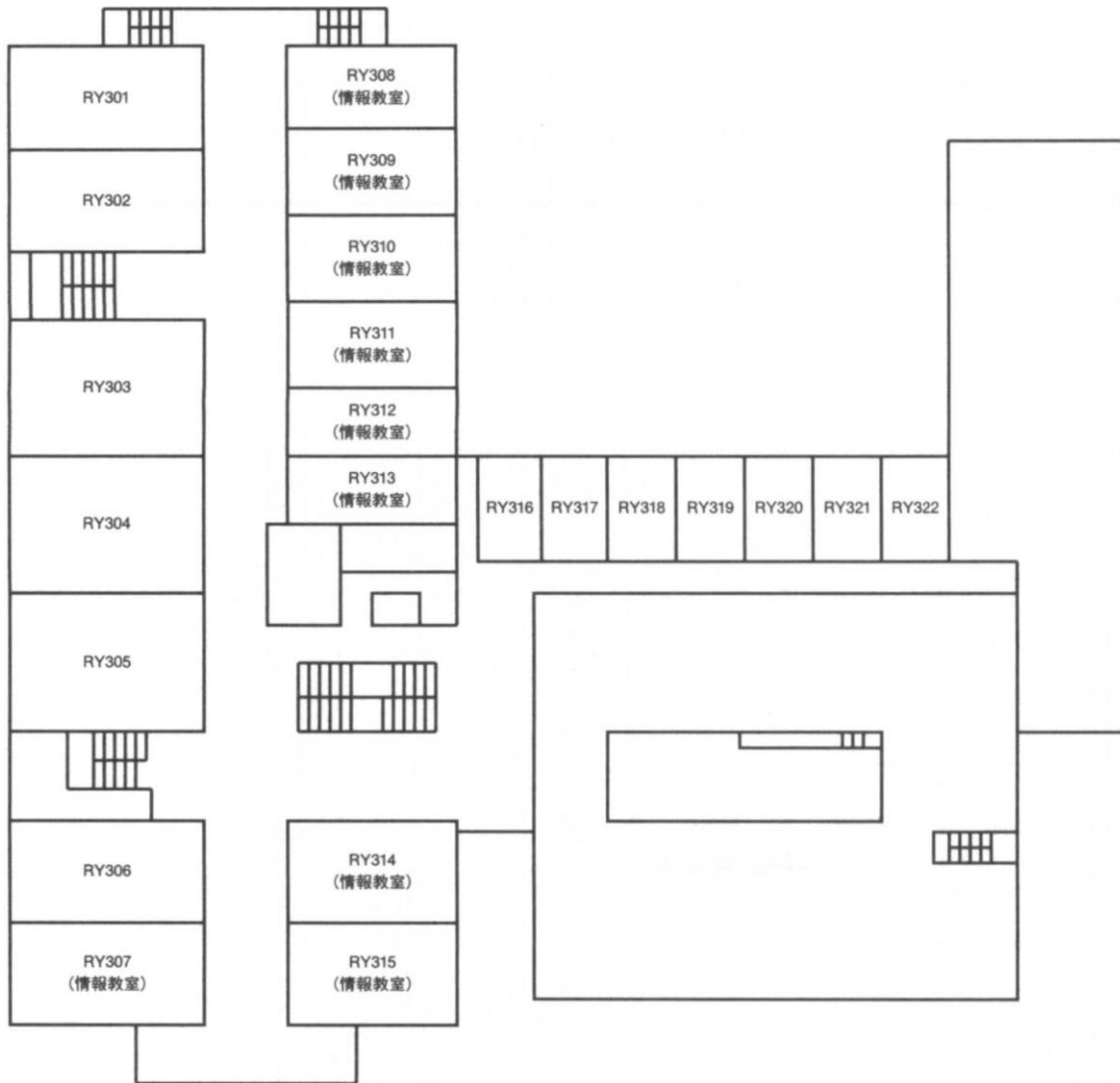
一方、2013年の台湾の社会では、政権が国民党から民進党に交代した際に建設停止された第4原子力発電所の再開を国民投票に訴えようとする騒ぎがマスメディアを賑わしている。「原発」の影響は台湾にも影を及ぼし始めている。同じ島国の台湾にも日本の経験は必ず有益であろう。

「他山の石」と言われるように、日本の経験から学び、日本語の勉強、日本の事情、さらに異文化の観点による学習を狙い、比較的筋のある読み物と思われる「原発」を主題に取り上げた文学作品から、川上弘美「2011 神様」（2011.7）、多和田洋子「不死の島」（2012.2）を選んで、台湾の大学4年生の「日本名著選読(二)」授業に教材として使った。

本発表では、異文化理解の観点から受講した台湾の大学（淡江大学）4年生の作品への見方と学習効果を分析し、文学を利用した異文化理解学習の事例研究の成果提示を目的とするものである。

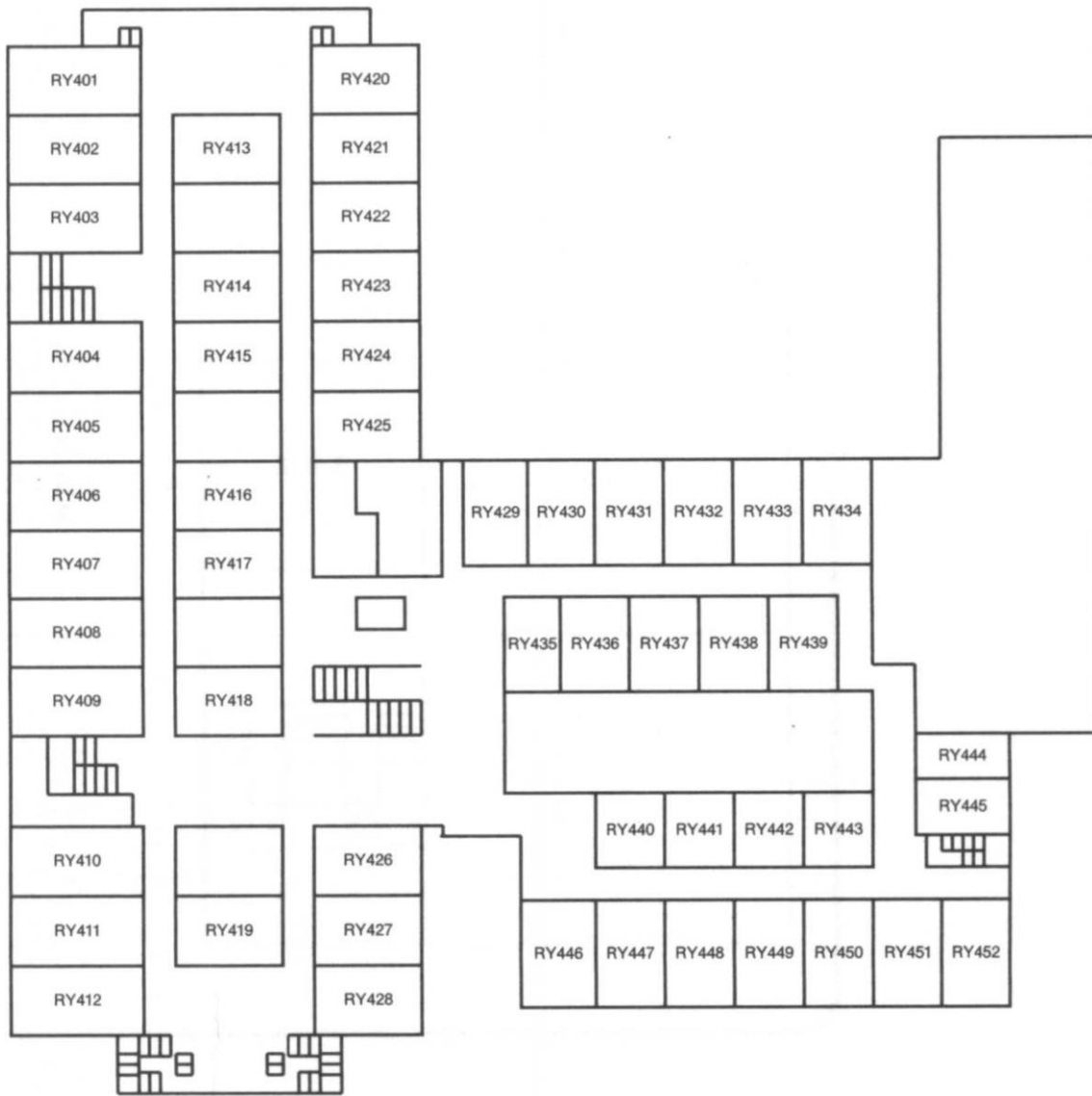
キーワード：3・11 文学作品 原発 教材 異文化

同志社大学良心館（今出川キャンパス）3階





同志社大学良心館（今出川キャンパス）4階



**比較文化論 No. 31**

発行：

2013年6月8日

日本比較文化学会

本部事務局：

〒610-0394 京都府京田辺市多々羅都谷 1-3

同志社大学言語文化教育研究センター長谷部研究室内日本比較文化学会事務局

第35回日本比較文化学会全国大会準備委員会事務局：

607-8175 京都市山科区大宅山田町 34 京都橘大学人間発達学部 北林利治研究室

e-mail:VZV00407@nifty.com

印刷：

株式会社 田中プリント

京都市下京区松原通麩屋町東入石不動之町 677-2